# セカイにひとり

麦（穀物P）

# 目次

第一部　セカイにひとり　上 …… 3
第一章　もふもふ喫茶の夢 …… 4
第二章　欠けたセカイ …… 14
第三章　ひとりぼっちの魔法使い …… 78
第二部　月はまた満ちる …… 159

# 第一部　セカイにひとり　上

# 第一章　もふもふ喫茶の夢

(World Line Kigumi)

「ココアさん、起きてください。ココアさん」
「むにゃむにゃ、あとにじゅっぷん……ぐー」
「今日はお仕事の日ですよ」
「ぐー」

「起きないとおやつ抜きですよ……お姉ちゃん」
「はっ！　今、お姉ちゃんって呼んだ!?」
「呼んでません。早く支度してください」
ココアさんがラビットハウスに来て二年目、相変わらずのねぼすけさんです。事あるごとに『実家はパン屋さんだから早起きはお手のものだよ！　チノちゃんを起こしてあげる！』と言っていますが、いまだ果たされていません。もし果たされたなら、その時は姉と呼んであげなくもないです。たぶん。
ココアさんが半分寝たまま着替えに行った頃、リゼさんが出勤してきました。
「おはようチノ。ココアは今日も寝坊か」
「はい。今着替えに行っています」
「相変わらずだな」

リゼさんは笑いながら、お店の制服に着替えるためにバックヤードに入っていきました。

「さあ、今日もいちにちがんばるよ！」

「はい」

「ああ。……で、今日はお客さんは来るんだろうか」

私の悩み、それはラビットハウスが喫茶店として営業している昼間に来るお客さんが少ないことです。夜のバータイムは結構盛況なのですが。喫茶店を盛り上げるにはどうしたらいいでしょうか。

「お客さんにティッピーをもふもふしてもらおうよ！」

『疲れるから嫌じゃ』

「チノちゃんの腹話術で即座に否定された！」

「だいたいティッピーは一羽だけです。お客さんに順番にもふもふさせていたら大変です」
「だな。せめてこの毛玉があと二羽はほしいところだ」
「わかった！　じゃあ公園でつかまえてくる！」
私やリゼさんが止める間もなく、ココアさんは駆け出して行き……そして扉に激突しました。
「ぐええ……」
「大丈夫ですかココアさん」
「大丈夫かココア？」
「あら、何かにぶつかったような音がしたのだけれど」
「ってココア、何があったの!?」
ちょうどやって来たのは千夜（ちや）さんとシャロさんでした。

「そう、で、うさぎを捕まえてこようとしたというわけね」
シャロさんがココアさんの話を聞きながらうなずいています。
「アンゴラウサギが三羽になると、どれがティッピーかわからなくなりそうね、ココアちゃん」
「はっ！　そうだった！　みんなもこもこもふもふだとわかんなくなりそう！」
「そもそも公園のうさぎをほいほい捕まえてきていいかという問題もあるわ」
「公園で管理しているうさぎと、野良うさぎが一緒になって駆け回っているという話もありますし」
「公園管理のうさぎには何か目印があるんじゃなかったっけか」
「いろいろ確認が必要そうですね」

私や父にとっては、ティッピーはおじいちゃんなので、あと二羽やってきても見分けはつけられるのですが。

「うちのあんこと、シャロちゃんちのワイルドギースをしばらくラビットハウスに連れてきてもふもふキャンペーンを開くのはどうかしら」

『嫌じゃ』

「またダンディーな声で否定された！」

「あんこがティッピーを追いかけまわすから、お客さんにもふもふさせるどころではないと思いますよ」

もふもふで盛り上げる作戦、前途多難（ぜんとたなん）みたいです。それ以外の作戦を考え始めたところ、新たなお客さんがやってきました。

「こんにちは〜、今日もお世話になります〜」

「やっほーチノ！」

「こんにちは～チノちゃん」
青山さんと、マヤさんメグさんでした。

「ラビットハウスを盛り上げる作戦？」
「そうなんだよ！　せっかくいいお店なのに、なかなかお客さんが来てくれないからチノちゃんが悲しんでるんだよ！　何したらいいかな～？」
「こういう時は、前お客さんでいっぱいになった時を思い出すといいんだって～」
「やっぱあれかな、クリスマス！　私とメグも手伝いに入ったくらい忙しかったでしょ」
「毎日キャンペーンやればお客さんいっぱい来るかもしれないわね」
「じゃあ毎日パンを焼こう♪　そうしよう♪」

『うちは喫茶店じゃ……』

「さすがに毎日パンのキャンペーンをしていたらパン屋さんになっちゃいます」

でも、月に一、二回くらいでしたら、ココアさん特製のパンとのコラボレーションもいいかもしれません。

さて、夕方になりましたので、喫茶店ラビットハウスは閉店です。夜はいつもの通りバータイムになります。

「チノちゃん、今日もいちにちお疲れ様〜！」

「お疲れ様です、ココアさん。今日もひなたぼっこしていたのは知っていますよ」

「ぎくっ」

「まあ、悲しいことにココアがひなたぼっこしてても回るくらい、今日は常連さんしか来なかったんだけどな」
「いいんです。常連のお客様に大切にされるラビットハウスを目指すんです」
「ラビットハウスのあったかい感じを好きになってくれるお客さんがいっぱい来てくれるといいね♪」
「……そうですね」
「そうだな」

夜、ココアさんと一緒に夕ご飯を食べて、お風呂にしようとしたとき、ココアさんが一緒に入ろうと誘ってきました。八十八回目のココア風呂だそうです。八十八夜だよ！　などと言っていました。
「チノちゃん、今日もいちにち楽しかったね」

「はい、楽しかったです」
「明日はお仕事お休みだし、どこかおでかけしない？」
「明日はボトルシップを組み立て始める日です」
「え～おでかけしようよ～」
「……しかたないですね」
「ほんと⁉　やったー！」

「それじゃあおやすみなさい！　チノちゃん！」
「おやすみなさい、ココアさん」
明日がちょっと楽しみになりました。また明日、よい日になることを願って。

# 第二章　欠けたセカイ

(World Line Kigumi-F)

目が覚めた。またいつもの夢を見ていたらしい。急速にその輪郭(りんかく)が失われていく。自分に大切な人がいる、そんな感じの夢。

木組みの家と石畳の街の高校に進学するとともに、母の友人である香風(かふう)さんの家に下宿(げしゅく)することになった。高校の方針で、下宿させてもらうとともにその

家でご奉仕するように伝えられていたため、香風さんが経営している喫茶店「ラビットハウス」で働くことになった。今日は土曜日で、朝から夕方まで店番をすることになっている。

「ふわあぁぁぁ……おはようございまーす……むにゃむにゃ」

「おはようココアちゃん。朝ごはん用意できてるわ」

ダイニングに顔を出すと、サキさんが笑顔で出迎えてくれた。ラビットハウスはサキさんとタカヒロさんが夫婦で切り盛りしている。子どもさんはいなくて、ひと月前に私が下宿することが決まった時は「娘ができたみたい！」ととても喜んでくれた。

焼きたてのパンを食べ、サキさんが入れてくれたコーヒーを飲むと、ぼんやりしていた意識がしっかりしてくるのを感じた。……えーと、これはブルーマウンテンだね！　働き始めて三週間、豆によるコーヒーの味の違いが少しわか

るようになってきた。

「それじゃ、今日もいちにちがんばりましょう！」

「はい！　サキさん！」

朝九時、お店の外に看板を立て、ドアの札を返して「ＯＰＥＮ」にした。開店と同時にお客さんが何組か来て、早速忙しくなった。厨房でタカヒロさんがモーニングプレートを作り、サキさんがコーヒーを淹れ、私がウェイトレスとして客席の間を行き来する。サキさんいわく、私が来てからお客さんが増えたらしい。

「ココアちゃん目あてのお客さんが多いんじゃないかな？　招き猫さんだね！　ありがたや～ありがたや～」

……サキさんはとても快活で面白い人だと思う。私も見習いたい。

十時半、お客さんの流れが一段落した。このあとまたランチタイム、午後とお客さんはまだまだたくさん来る。今のうちに客席をピカピカに磨き上げ、カウンターで少し休憩。

「ココアちゃん、学校の方はどう？」

「はい！　だいぶ慣れました！　お友達も何人かできました。意外と私みたいに遠くの街から来て下宿している子が多いみたいです」

「そうね～。あの高校は昔からそんな感じね。いろいろな街の様子が聞けて楽しかったわ」

「楽しいです！　お父さ……父が働いている大学がある街から来てる子がいて、話が盛り上がりました！」

「ココアちゃんのお父さんが働いている街って大都会よね？　あの街も面白いところよね」

「はい！」
「ところで、うちのお仕事と勉強の両立、大変じゃない？」
「うーん、高校の方でそのあたりは配慮してくれてるので、なんとかなってるかなって感じです。数学と物理は面白いんですけど、国語と英語がちょっと苦手で……」
「あはは……」
サキさんとのおしゃべりを楽しんでいると、お店にひとりの若い女の人が入ってきた。
「いらっしゃいませ～、あ、青山さん！」
「こんにちは～」
小説家の青山ブルーマウンテンさん。二日に一回はラビットハウスに来て、コーヒーを飲みつつ原稿を書いている。土曜日は一週間おきにラビットハウス

のバータイムでお仕事をしているみたい。青山さんいわく、
『バーでみなさんとお話をするとインスピレーションが湧くんです～』
らしい。
「今日は何になさいますか？」
「オリジナルブレンドをお願いします～」
サキさんが淹れたコーヒーを持っていくと、そのまま青山さんに捕まってしまった。
「ココアさんみたいな方を主人公にして、お話を書いてみようと思っているんです」
「えへへ、光栄ですけど……私特に面白いところとかありませんよ？」
「ココアさん、よく公園でうさぎに懐かれていますよね。稀有な才能だと思うんです。そうだ、『うさぎに愛された少女』、これで書いてみましょう」

青山さんはそう言うと、原稿用紙に万年筆を滑らせはじめた。綺麗な文字でマス目がどんどん埋められていく。私は作文が苦手なので、こうしてさらさらと文章を書ける人にはとても憧れている。青山さんが集中モードに入ったので、私はそっとテーブルを離れた。

一時落ち着いていた店内に、またお客さんが増えてきて、それからはてんてこ舞いだった。こう、あとふたりくらい店員さんが――あれ……？　ふたり……？

この街に来てから、時々頭が痛くなる。なにか大切なことを思い出せない。そんな感じの痛み。

「店員さーん」

「あ、はーいただいま！」

思考は中断され、客席の間を走り回っているうちに、心の引っ掛かりのこと

をいつの間にか忘れていた。

午後四時、ラビットハウスのカフェタイムが終わる。午後六時からのバータイムはタカヒロさんが独りで仕切り、私とサキさんは少々休憩。

「ココアちゃんお疲れ様。今日も盛況だったわね」

「すごいです！　街一番の人気店なんじゃないですか？」

「そうだといいわねえ。これもココアちゃんのおかげね。お義父さんがお店を始めたばかりの頃は、閑古鳥が鳴いてばかりでね、私が兼業キャリアウーマンとしてバリバリ稼いで支えていたの」

「キャリアウーマン！　憧れます！」

「ありがとう。しばらくしてタカヒロさんが退職して、バータイムを始めたらお客さんが来てくれるようになって、それでお店が軌道に載ったの。で

もね……」

サキさんはそこで一度言葉を区切ると、寂しそうに窓の外を見た。

「お義父さんが倒れて、そのまますっと逝ってしまった」

その頃のことは、私も覚えていた。葬儀のためにお母さんがこの街へ行ったんだった。

「もう五年も経つのね……」

それを期にサキさんも退職し、ラビットハウスをタカヒロさんとともに盛り立てていると話してくれた。

「私、お店でお役に立ててますか？」

「もちろん！　ココアちゃんのおかげでお客さんがいっぱい増えてるし、かわりばんこで休めるようにもなってとても助かってるのよ」

「よかった……」

お風呂に入り、お湯につかりながら、この三週間のことを思い返していた。故郷を旅立つ時、お母さんとお姉ちゃんが駅まで見送りに来てくれた。不安でいっぱいだったけれど、でもお姉ちゃんがぽろぽろ涙をこぼしながら抱きしめてくれたから、とても安心した。この街に着いてから、香風さんの家を探し歩いているととてもわくわくしてきた。街にいっぱいいるうさぎさんとも触れ合って、道を訪ねようとして入った喫茶店「ラビットハウス」が、目あての香風さんちだった。

サキさんとタカヒロさんが暖かく出迎えてくれ、その日からラビットハウスでお仕事を始めた。最初は注文を取って、コーヒーをこぼさずに運ぶのがやっとだった。コーヒー豆を運ぼうとしてびくともせず、タカヒロさんに助けてもらった。サキさんが豆一袋を軽々と持ち上げたのにはびっくりした。

高校でもすぐに友達ができた。クラスのみんなと仲良くなって、連絡先を交換したのは自慢です、えへん。学校でもおうちでも、みんなとすぐにこみゅにけーしょんできるのは楽しいね！

でも、何か忘れている気がするんだ。そのことを考えると、どうしてかわからないけど、とても胸が苦しくなる。ひょっとして恋なのかな、そう思ってクラスの子にそれとなく話してみたら、

「ココアちゃんはとてもモテそうだしねー」

「忘れてしまった想い人がこの街にいるんじゃ!?」

そこから恋バナ？　みたいな感じになった。やっぱり恋じゃないみたい。どちらかというと、生き別れの姉妹を求めるような感じ？　なんだかよくわからないけど、でもいつもみたいに「まあいっか！」と割り切ってはいけない気がした。

「この気持ち……なんだろうなー……」
なんか頭がぼんやりしてきた……

「ココアちゃん大丈夫？　あれっココアちゃん、ココアちゃん！」

「ごめんなさいサキさん」
気づいたら、お部屋のベッドの上にいた。サキさんがうちわで私をあおいでくれている。お風呂でのぼせてしまったらしい。
「びっくりした。お風呂から半分乗り出したような感じでぐったりしてたもの。溺(おぼ)れなくてよかったわ」
体も頭も茹(ゆ)だってしまって、今日はもうそれ以上考えることはできなかった。

日曜日。今日はラビットハウスでのお仕事はお休みになった。もう体は大丈夫だとアピールしたけれど、サキさんとタカヒロさんの両方から有給休暇を言い渡された。

「この街をお散歩してみたら？」

サキさんの勧めに従い、まだ歩いたことのないところを中心に街をめぐることにした。

この木組みの家と石畳の街は、とても綺麗でかわいい。この街に初めて降り立った時に感じた、楽しく暮らせそうという直感は正しかった。本当にいい街。なにひとつ不満はない。……でもやはり、なにかが足りない。

ラビットハウスからしばらく歩いたところに、和風の甘味処「甘兎庵」を見つけた。

「おれ、うさぎ、あまい……？」
「あまうさあん、だよ。変わった子だね」
店主のおばあさんに声をかけられた。せっかくなので入ってみることにした。入口の脇にじっと黒うさぎが座っている。手を振ってみたけどピクリともしなかった。
「うーん、この『スペシャル鯱（しゃちほこ）パフェ』をお願いします！」
「お嬢ちゃん健啖家（けんたんか）だねえ、覚悟して食べるんだよ」
「けんたんか？」
「大食いってことさ」
カカカッ、おばあさんはそう笑って厨房に向かった。
出てきたパフェはとても大きかった。でも私の敵ではない。
「いただきまーす」

一口で、超一流の職人さんだと見抜いたよ。抹茶の苦味とあんこの甘味が絶妙にマッチしている。そして鯱とは、一番上に飾られているミニサイズの鯛焼きのことらしい。すごい、手が止まらない。自分でもびっくりするくらいどんどん食べられる。

「ごちそうさまでした」

「素晴らしいですね～」

横からパチパチと手を叩く音が聞こえた。青山さんがそこにいた。

「青山さんいたんですか！」

「ええ、原稿を進めていました」

そう言いつつ、青山さんはなぜかしゃがみ込み、私の膝（ひざ）のあたりを眺めていた。

「ココアさんをまたひとつ知ることができました。原稿が更に進みますね～」

青山さんは週に一、二回は甘兎庵で執筆をしているらしい。ラビットハウスと合わせると……あれ、外でお仕事している方が多い？

「青山さん、やっぱり外のほうがインスピレーションが湧くんですか？」

「そうですね～、街を巡っているといっぱい思い浮かびますね～」

「思い浮かべるだけじゃなくて、ちゃんと形にしな。昨日も凛（りん）が泣きながら探しに来たよ。『翠（みどり）ちゃ……青山先生来てませんか⁉』ってね」

店主のおばあさんの言葉にうふふ～、と言いながら目を泳がせる青山さん。締切を守るのはやっぱり大変みたい。

また来な！　おばあさんに見送られて甘兎庵を出て、再び歩き始めた。今度は野良うさぎを追いかけてみる。よし、あのかわいい子に決めた！

ぴょこぴょこと移動するうさぎを追いかけていると、広場に出た。そうここで――が、――して……え？　突然心にざわめくものを感じた。なにか大切な

ものがこの広場にある。でも私はここに来たことがない。ちょっとベンチに腰掛けて考えてみることにした。

今までも、ラビットハウスだけでなく、高校や、街を歩いているとき、こうしてなにか引っかかることがあった。この場所は特にその引っかかる感が強い。でも何なのか全くわからない。こういうときはノートに書き留めておきなさい、大学教授のお父さんはいつもそうアドバイスをくれた。その教えに従い、広場のことを書き留め……あれ、ここどこだろう？

とりあえず目に入ったものを全部ノートに書き込んでおいた。こうすれば、いざというときサキさんや青山さんに聞くことができるはず。よし、街のお散歩再開。

街を巡っていると、ひときわ大きなお屋敷の前に来た。門の両側を黒いスーツにサングラスを掛けた怖い男の人が守っている。表札には「天々座」とあっ

た。てんてんざ？　すごいお金持ちがいるんだなあ、たとえばお嬢様――

ざわめき、ふたつめ。ここにも何かがあるのでは……いつの間にかお屋敷の方に近づきすぎていたらしい。怖い男の人二人がそばに来ていた。

「もしもしお嬢さん」

「こちらの家になにか御用ですかい」

「だだだ大丈夫ですちょっとふらっとしただけです何でもありません！」

慌てて逃げ出した。後ろから「ふらっとしたなら休まれてはいかがですかい？」とか聞こえた気がしたけど怖い！　怖いものからは逃げるのみ！　三十六計逃げるに如かずだよ！

十分に逃げてきたあと、お屋敷のこともノートに書き留め、また街歩きに戻った。だいぶおなかも落ち着いてきたし、そろそろ喫茶店に入ろうかな。ふ

と目を向けると、『fleur du Lapin』という看板が目に入った。なんとかラピン？　近づいてみたら小さい文字で「フルール・ド・ラパン」と書かれていた。ハーブティーのお店らしい。

「いらっしゃいませ、フルール・ド・ラパンへようこそ。ココア様♪」

「ありがとう……ってなんで私の名前……あ」

見上げると、お店の制服を着たクラスメイトの姿があった。たしかクラスの委員長をしている、見た目もめっちゃ委員長な……

「ほわっつゆあねーむ？」

「忘れたんかい!?」

委員長でいいよ、と言ってくれたので、ありがたく委員長と呼ぶことにした。しかし、委員長とお店の制服の組み合わせは、

「なんかいかがわしい……」

メニューで頭をはたかれた。
おすすめのハーブティーを聞くと、リラックス効果のあるリンデンフラワーを勧められた。
「ココアはさ、底抜けに明るいようでいて、わりとよく考え込む方でしょ？なんか疲れてる感じもするし、落ち着けるハーブを選んだわ」
「ありがとう。えへへ……前にも同じことを言われ――」
言われた気がする。誰に？　なにか思い出せる気がする……でも思い出そうとすると頭が痛い。
「大丈夫？　お店の裏で休んでく？」
「ごめん、もう大丈夫」
記憶力に効くハーブティーがないか聞いてみると、ペパーミントティーを紹介された。

「記憶力向上にはこれね。でも記憶を呼び覚ますことができるかどうかはわからない」

リンデンフラワーティーとペパーミントティーを飲みつつ、ノートを見返してみた。これらの場所になにかの手がかりがあるはず。数学で言うところの、未知数を明らかにするための方程式が。

条件を整理したけど、まだ必要なピースが欠けているみたい。欠けたピースを探し出さないと。委員長に見送られてフルール・ド・ラパンを後にし、公園に行ってみることにした。公園にはうさぎがいっぱいいて、ちょこっともふもふすることもできるみたい。

公園の入口にはクレープ屋さんの屋台があった。ハーブティーでおなかがたぷたぷしているので、ここはクレープを食べてバランスを取らないと！　同じことを故郷の街でもしていたら、友達に頭をぐりぐりされたっけ。なんで太ら

ないんだ、って。

クレープをもきゅもきゅ食べながら近場のベンチに行く。立て看板には、野良うさぎに食べ物を取られたり、鳥にさらわれたうさぎが空から降ってくることもあるので注意しろ、と書かれていた。まさか空から降ってくるなんてね、あるわけないよね。

「あらココアさん、また会いましたね〜」

「青山さん！　奇遇ですね！」

青山さんにまた出会った。立て看板に書いてあるようなことが実際に起きるか聞いてみると、

「ええ。空からうさぎさんが降ってきますよ――」

その時、私の膝に空から黒い塊が着弾した。

「――こんなふうに」

青山さんがウインクした。このうさぎ、どこかで見たことがある。

「あら～、甘兎庵のあんこちゃんですね～。またカラスにさらわれたんですね」

さっきの甘味処（かんみどころ）のうさぎさんだった。ほっといても自分で帰り着くと思うけど、せっかくなので連れて帰ります～、そう言って青山さんはあんことともに公園を出ていった。

公園のうさぎさんをもふもふしながら考えを巡らせていると、ふと遠くにもじゃもじゃした白い毛玉が見えた。あれもうさぎ？　ふと気になって腰を上げると、その毛玉はすごい勢いで逃げていった。もふもふしたら気持ちよさそう。今までもふもふしていたうさぎさんに別れを告げて、毛玉が逃げていったほうを探しに行った。

毛玉がたくさんいた。

「わぁ……」

ユートピア、えーと、理想郷って言うんだっけ。まさにうさぎもふもふ党党員にとってこの上ない夢だよ！　もふもふしたい……じゅるり、おっとよだれが。毛玉にじりじりと近づいていく。おいでー、お姉ちゃんコワクナイヨー、ちょっともふもふするだけだよー。さらに近づいていくと、毛玉の群れも徐々に遠ざかっていきつつあるように見えた。毛玉たちが公園の境目にある生垣まで後退し、もはや逃げ場がなくなったところで、よし、つかまえ――

「うわっ」

毛玉たちが一斉に四方八方に散った。びっくりして思わずしりもちをついてしまった。逃げ足が速く、あっという間に見えなくなってしまった。

「逃げられちゃったかあ」

次に来たときはもふもふ作戦をもっときちんと立てよう。今日のところはこのくらいにしてあげるわ、おほほほほ。このセリフ、なんか悪役のお嬢様みたいだね。

日がだいぶ傾いてきたので、そろそろラビットハウスに戻ることにした。えーっと、ここがこうで、あっちがそっちで……あれ？　あれれ？　ラビットハウス、どこ？　初めてこの街に来たときはまあいっか！　って諦めちゃった気がするけど、今日はそうするわけにはいかない。野宿になっちゃう。まだ街を独りで歩くには経験値が足りなかったみたい。こんなとき、――ちゃんが迎えに来て――

今日何度目かの、何かを忘れているような感覚。思わずその場にうずくまった。さっきのが一番大切なものに違いない。感覚を思い出すんだ、ココア。

『――ちゃん』

もしかして、誰かのことを忘れている？　誰？　頑張ってみたけど、今日はそれ以上のことは思い出せなかった。でも一歩前進。お父さんが言ってたんだ、研究はわからないことの連続だ、って。何かひとつでもわかったらそれは大きな前進だって。よし、この街での最初の研究テーマは「何か忘れている気がすることを思い出す」にしよう。ラビットハウスに帰って早速研究だ！

立ち上がって一歩踏み出して思い出した。

「ラビットハウスへの帰り道がわからないんだった……」

街をさまよい歩くこと小一時間、フルール・ド・ラパンでのアルバイトを終えて家に帰る途中だった委員長に出会い、無事ラビットハウスまで案内してもらえた。

月曜日、学校がまた始まる。さすがに高校までの道のりはこの三週間で覚え

た。初めて学校に行った日は道に迷って、案内してもらったんだっけ。誰か街の人。しかもその日入学式だと思ってたら、実は次の日だったというオチがついた。

「おはよー」

「おはよーココア」「おはようココアちゃん」

クラスのみんなと会えると、やっぱり嬉しい。週末に感じた寂しさみたいな感じも、ここでなら感じずに済みそう。今日は好きな数学と物理の授業があるから頑張るよー！

物理の授業では、これから学ぶ古典力学（こてんりきがく）と、その先に学ぶ量子力学（りょうしりきがく）についての簡単な説明があった。世界の動きが数学によって説明できる、そのことになんだかとてもわくわくする。もしかしたら、謎を解くのに参考になるかもしれない。

「さて、量子力学は、ＳＦでよく出てくるパラレルワールドやタイムトラベルといった話を現実にしたり、フィクションのままにしたりする理論にも応用されます」

今まで興味なさそうに話を聞いていたクラスメイトまでもが、身を乗り出して話を聞き始めた。量子力学のさわり、量子重ね合わせ、観測問題などなど、とてもわかりやすく説明してくれた。

「実は私もタイムマシンに憧れて物理の道に進みました。残念ながら、時間を自由自在に行き来できるタイムマシンはフィクションのままですが、並行世界は現実に存在してもおかしくなさそうです。こちらも世界移動の手段はフィクションのままなのですけど」

昼休み。購買にパンを買いに行った。種類が豊富で、どれもおいしい。でも

最高においしいのは実家、Hot Bakery のパンだと思っているよ。そうだ、今度ラビットハウスのオーブンを借りてパンを焼いてみようかな。みんなと焼くと楽しいだろうな。

クラスメイトを思い浮かべていると、ふと脳裏に違うイメージがちらついた。クラスメイト以外の人となにか面白いパンを焼いたような――

「――、ココア」

「……えっ、あっ、ごめん。ちょっと考え事してた」

委員長が心配そうに顔をのぞき込んだ。

「最近寂しそうな顔してる。ホームシック？」

「そそそそんな事ないよ⁉　だってみんないるし、ラビットハウスのサキさんとタカヒロさんもやさしいし」

「ふうん、何かあったらすぐに言うんだぞ。ドンと解決！　とまではいかない

けれど、話すだけで変わってくるからね」

「ありがとう、えへへ」

放課後、みんなと別れてラビットハウスに帰る。平日は週に二回、短時間お手伝いをすることにしている。サキさんもタカヒロさんも、平日は学業に専念するようにと言って譲らなかったけど、なんとか頼み込み、学力テストで数学と理科の成績が良かったことを説明して認めてもらった……うん、二人に嘘はついてないよ。嘘はついてない。英語と歴史と国語の悲惨な成績を見せてしまったら、土日のアルバイトすらも完全に外されてしまうに違いない。苦手克服を頑張るよ。

「おかえりなさい、ココアちゃん。今日は暇だからお休みでいいわ♪」

「いきなりいらない子宣言されちゃった……」

「もう、拗ねないで。ココアちゃんはラビットハウスの救世主よ」

「そう言ってくれると嬉しいです！」

客席を見渡すと、今日も青山さんが来ていた。手招きされたのでそちらにお邪魔することにした。

「こんにちはココアさん。早速ですけど『うさぎに愛された少女』の初稿(しょこう)ができました～」

「速い！」

「一気に筆が進みまして～、まあ、凛さんが催促(さいそく)するから急いだということもあるんですが」

「青山先生が締切を守ってくれればいいんです！　もう二週間オーバーですよ！」

気がつくと女の人がゼーゼー言いながら横に立っていた。

「あら～凛さん」

「あら～じゃないですよ青山先生、いや、翠ちゃん！」
この人が凛さんと言うらしい。たぶん出版社の編集さんだと思う。
「申し遅れました。青山の作品編集を担当しております、真手凛と申します」
「ラビットハウスの居候兼アルバイトの保登心愛です！」
お互いにご挨拶もそこそこに、今度は青山さんを店内で捜索することになった。なんと、私と凛さんが言葉をかわしているそのすきをついて、かくれんぼをしてしまったらしい。お店中を探し回ること十分、なんと座っていた席のテーブルの下にしゃがみ込んでいた。何ていうんだっけ、灯台下暗し？　まだ雑誌記事の原稿があるとかで、青山さんは凛さんに連れて行かれた。大人気作家は大変だなあ。
自分の部屋に戻り、部屋着に着替える。明日か明後日の放課後はお洋服屋さんを巡ってみようかな。そう思いながら携帯電話を開くと、クラスメイトから

のメールに混じって、謎のメールが届いていた。怪しいメールは開かずに捨てるのが鉄則だと、今まで散々習ってきていた。でもそのメールだけはなぜか気になって、つい開いてみてしまった。

中身はほとんど文字化けしてしまっていて、何が書いてあるのか全然わからなかった。でも一部だけ読める文字があった。

「ティッ……ピー……？　翠……？　並行？」

よくわからないので捨てようとしたけど、何か気になったのでそのまま残しておくことにした。

今日の夕食はカレーだった。味は超一流、ラビットハウスで出したら人気になるんじゃないかな。でも今のところ出す気はないらしい。タカヒロさんいわく、

「親父が生きてる頃にカフェメニューを増やそうと提案したのさ。でも親父が

首を縦に振らなくてね。コーヒーがおろそかになると言われたよ。その教えを守っているというのがひとつ。もうひとつは、結構仕込みに時間がかかってね。ちょっと手が回らないのが本当のところさ」

「タカヒロさん、今度カレーの作り方教えてください！　弟子入りさせてください！」

「いいだろう、ココア君。修行の道は厳しいぞ？　……というほどでもないな。レシピ自体は軍にいた頃の部隊に伝わるのが元で、それ自体は一般に公開されているしな。隠し味が秘伝だね」

「はい！　隠し味は私の舌で盗みます！」

「はっはっは、頼もしいな。でもまず――」

タカヒロさんはちらりと私のお皿を見て微笑んだ。

「――人参を食べられるようになるのが先かな」

好き嫌いの克服が立ちはだかった。修行の道はつらく厳しい……

それから週末までは特に何事もなかった。高校へ行き、帰りに街をめぐり、木曜日の夕方にラビットハウスでお仕事をしたけど、日曜日や月曜日のような変な感じはしなかった。「謎を調べるときは、図書館で本を漁りなさい」これもお父さんからの教えにあった。明日、土曜日は午後お休みにしてたから、ちょっと街の図書館に行ってみようかな。

金曜日の夜ともあって、お店の方は賑やかだった。さすがにタカヒロさんひとりでは手が回らず、サキさんと、さらにタカヒロさんの知り合いがヘルプに入っているらしい。私もお仕事しますと申し出たけど、高校からのお手紙で、お酒を扱う時間帯はアルバイトさせないようにと連絡が来ているらしい。その手紙がなくても、夜はゆっくりする時間だと言われた。

自分の部屋で「引っかかりノート」を読み返してみた。中身はこの前の日曜日と月曜日のことだけで、今週はまだ新しいことは書き加えていない。今まで感じた引っかかりに、なにか共通することはないか、ゆっくり考えを巡らせていると、携帯電話が短く鳴った。誰かからのメール。

「また変なメールだ……」

月曜日の夜に来ていたメールと同じ、文字化けしてしまっているメールだった。でも前来たメールよりも読み取れる文字が増えていた。

「思い出して……？　……六？　……また連絡する？」

このメールも残しておくべきだと、私の中の直感が告げていた。もしかしたら、引っかかりを解きほぐすカギになるかもしれない。ひとまずお風呂に入ろう。先週みたいに考え事はしないように。また倒れてサキさんを心配させちゃいけない。

土曜日。朝九時からラビットハウスでお仕事。今週末もお客さんが多くて、忙しくしていると何も考える余裕がなかった。お昼の一時まで働いて、今日は上がり。まだ忙しそうだったので延長で働こうとしたけど、

「ココアちゃん、休むのもお仕事よ？」

めっ、とされた。

バックヤードの更衣室で、ピンク色の制服から私服に着替える。アルバイトは私しかいないけど、制服はピンク以外に色違いでコバルトブルー、紫、緑、黄色、スカイブルー、サーモンピンクと合わせて七着用意されている。サキさんいわく、

「将来、ラビットハウスがもっと大きくなったら、アルバイトの子が増えると思って」

気分転換に他の色の制服を着てもいいわ、と言われたけど、なんとなく、袖を通さないままにしておいたほうがいい気がしている。ちなみに女性用のバーテンダー制服もあって、そちらは着てみたけど、残念ながらちんちくりんの私には似合わなかった。大人になったら似合うようになるかな？

ラビットハウスを出て、街の図書館へ向かう。高校へ行く道の途中にあるから、今度は迷うことはない。とても立派な作りで、ここの本を読んだら何でも知ることができそう。でも私の調べたいことはどの棚で見つかるのかな。物理学？　心理学？　脳科学？　もしかしたらオカルトやＳＦも参考になる？　時間はあることだし、全部の棚を回ってみよう。……あ、でもさすがにオカルトはいいかな。

まずは物理学の棚。月曜日に物理の先生が言ってた量子力学の本を探すと、大学の教科書みたいなすごい本が見つかった。今の自分の力で読み解けるかは

わからないけど、科目としては好きなので、なんとかなると思う。何冊かパラパラと読み、家でじっくり読もうと思った本一冊を持って次の棚へ。

心理学の棚、脳科学の棚では、人間の記憶に関する本を選び出した。忘れていることを思い出す方法が見つけられるかもしれない。最後に文学コーナーのＳＦ特集を見ると、タイムトラベルやパラレルワールドに関する小説が一箇所に並べられていた。物語は作者の描いた世界であって、実際の理論とは違うところも大きいのはわかっているけれど、取っ掛かりには使えるかもしれない。

合わせて五冊の本を持って、閲覧（えつらん）スペースに腰を下ろした。まずは人間の記憶に関する本から。忘れてしまっていることを思い出すためにはどうしたらいいのか。

記憶を呼び覚ますには、その記憶を思い出すためのきっかけとなる物事、タグが重要な役割を果たすらしい。そのタグから、するすると記憶を掘り出すこ

とができる。一説には、人間の脳は生まれてからのことをすべて記憶しており、忘れてしまうというのは、その記憶を掘り出すためのタグのつながりが切れてしまっている、らしい。この理論で行くと、私の記憶を掘り出すタグを見つけることができたら、引っかかっていることを思い出すことができるはず。

次にタイムトラベル。私が実は同じ時間を繰り返していて、その記憶の断片が残っている説。ただ、この可能性は限りなくゼロに近い。先生の話だと、タイムマシン理論を実現するための制約条件が厳しく、しかもタイムマシンができた時間よりも過去には遡(さかのぼ)ることができないという。

最後にパラレルワールド。実はパラレルワールドへの出入り口が存在していて、その場所が私には感じられる説。これは量子力学的には説明することができるみたいだけど、あくまでも原子レベルの小さい世界の話で、人間の体やモノのような大きい世界では今のところ成り立っていないという。

わからない。とりあえずノートに理論を書き留めておいた。もう少し詳しく考えるために、この五冊を借りていくことにしよう。カウンターに本を持っていき、貸出カードを作ってもらって本を借りた。

いつの間にか日が暮れようとしていた。

ラビットハウスに戻ると、手紙が届いていた。

「お姉ちゃんからだ！」

自分の部屋に駆け込み、荷物を置くのもそこそこに封筒を開いた。

『ココアへ

元気にしてますか？　お姉ちゃんは元気です。

ココアが引っ越して、お母さんと私の二人でパンの仕込みから販売、配達までするようになりました。ちょっと大変ですが、だいぶ慣れました。

木組みの街で友達はできましたか？　ココアのことだから学校中のみんなとすぐに仲良くなっていることと思います。ラビットハウスでのご奉仕はうまくできていますか？　お仕事と勉強の両立は大変だと思いますが、ココアならできると信じています。ご近所さんからもココア宛てに「頑張ってね」「たまには顔を見せに帰っておいでね」と、いっぱい励ましの言葉をもらっています。お姉ちゃんもたまにはココアの顔を見たいです。木組みの街に行っちゃおうかな？

お姉ちゃんより

追伸 by 母

モカが全力を取り戻すまでに半月かかりました。ココアシックでしょうか、

それともシスターコンプレックスでしょうか。いつも上の空でココアのことばかり考えていて、パンを焼いてもらっても真っ黒焦げになったりしていました。

タカヒロさん、サキさんによろしくお伝えください。

母より』

思わず笑ってしまった。こっちからもお手紙書かなきゃ。この街の写真と、ラビットハウスの写真と、あとはサキさんとタカヒロさんと、それから――ちゃん、

私は立ち止まった。誰の写真を撮ろうとしたんだっけ……？　サキさんと、タカヒロさんと、他に誰かいる？　……だめだ、思い出せない。ベッドに倒れ込んで、思考を巡らせながら思い出そうとしたけど、無理だった。

そんな時、また携帯が短く鳴った。また変なメールだった。前々回、前回、今回と、回を追うごとに文字化けの割合が減り、だいぶ読めるようになってきた。

『木組みの街のココアへ
今度こそ安定してメールを送れていることを期待します。あまり長くなると情報が欠落するらしいので手短に行きます。記憶を思い出すためのものを送りました。明日には届くと思います。別のメールでX!!=@の写真を送ります。
――のココアより』

完全に名指しだった。ただの迷惑メールとは思えない。なにか変なことが起ころうとしているように感じた。何かの写真も送られてくるらしいが、その部

分がピンポイントで文字化けしてしまっていた。

胸騒ぎがする。誰かに相談したいけど、誰に相談したらいいのかな。サキさん、タカヒロさんには心配かけたくない。クラスメイトに相談するのもなにか違う気がする。お姉ちゃんかお母さんは……遠い。そして一人思い浮かんだ。

「青山さんに相談してみようかな」

青山さんは明日はラビットハウスに来るはず。その場で相談するとサキさんやタカヒロさんに聞こえてしまうかもしれないから、来週のどこか都合のいい日に相談に乗ってもらおう。

日曜日。青山さんは十時過ぎにラビットハウスにやって来た。

「こんにちは〜」

「こんにちは、青山さん！」

「ココアさんこんにちは～」
「ご注文は何になさいますか？」
「今日はキリマンジャロでお願いします」
「ありがとうございます！　サキさん、キリマンジャロお願いします！」
コーヒーを青山さんの席に届け、しばらく様子をうかがいつつ、他のお客さんの応対をしていた。一段落したところで、青山さんの席の方へ行った。
「青山さん」
「相談事があるんでしょう？」
「えっ、どうしてそれを……」
「顔に書いてありましたから～」
青山さんにはかなわない。そう思った瞬間だった。制服のポケットに隠し持っていた手紙をそっと差し出す。

「ここで開いてもいいですか？」
「はい」
青山さんは私の手紙を読み始め、しばらくするとうなずいて、手元の原稿用紙にさらさらと何かを書き始めた。原稿用紙が半分くらい埋まったところで綺麗に折りたたみ、私の方にすっと差し出した。
「文通って、いいものですね」
うふふ、青山さんは微笑んで原稿執筆のお仕事に戻った。
フロアが落ち着いたのを見計らってバックヤードに行き、更衣室で青山さんからの手紙を読んだ。
『今日のディナーをご一緒しましょう　青山』

思ったよりも早かった。サキさんとタカヒロさんには青山さんから話を通しておくこと、青山さんは夕方に編集部での打ち合わせがあるので現地で待ち合わせること、服装は普段着で大丈夫なことなどが添えられていた。

表に戻ると、ちょうど青山さんがサキさんに話をしているところだった。

「それでは今夜、ココアさんをお借りします。よろしくお願いします」

「こちらこそ、どうぞよろしくお願いいたします」

青山さんがお店を出ていくと、サキさんがひじでうりうりしてきた。

「ココアちゃんすごいじゃない！　今度出る青山さんの本のモデルになるんですって？」

「え？　ああ、うん、そうですね～」

「青山さんはお礼だって言ってたけど、やっぱり手土産は必要よね……よし、ちょっと厨房にこもるから表お願い！」

「へ!?」

止める暇もなく、サキさんは奥に引っ込んでしまった。私まだコーヒー淹れられないんですけど……幸い、入れ替わりにタカヒロさんが表に出てきた。

夜、お店の雰囲気にできるだけ合う服を選び、サキさんお手製のお土産を手にして、目的のお店に向かった。時間になっても来ない時は先に入って待っているようにとのことだった。

超一流のレストランだった。回れ右したくなったのをこらえて待っていたけど、時間になっても青山さんは来ない。お仕事が押しているんだろう。覚悟を決めてお店に入った。

「六時半に予約しておりました、あ、あの、青山という名前で……」

「青山様のお連れ様ですね。ようこそお越しくださいました。お席へご案内いたします」

びくびくしながら後をついていくと、個室に通された。
「青山様よりご伝言をことづかっております。七時頃こちらにご到着されるとのことです。お飲み物と軽いお食事はいかがでしょうか」
「え、ええっと、その、別料金だったりします？」
「青山様にはいつもご利用いただいておりますので、少しばかりですが、サービスとさせていただきます」
オレンジジュースと軽いおつまみをもくもく食べながら待っていると、青山さんがやって来た。
「ごめんなさい～、お仕事が遅くなっちゃいました」
「いえ大丈夫です！　こここんなごごご豪華なとところで」
「ちょっと込み入った話になるので、個室がいいかなと思いまして。バーの片隅でお話するのもいいかと思いましたけど、ココアさんに不良さんのイメージ

がついたらまずいかなと」

それから、コース料理を食べつつ、青山さんに事の次第を話した。最近、何かを忘れているような感覚があること、変なメールが来ていることなど。例の「引っかかりノート」も読んでもらった。青山さんはうんうんとうなずき、それからちょっとの間考え込んでいた。

「私は専門家ではないので、確実なことは言えないのですが、小説の題材のためにいろいろな文献(ぶんけん)を読みましたので、それを元にお答えしますね」

「まず、何かを忘れているような感覚というのは、三つの可能性に分けられます。ひとつは、本当に何かを忘れていて、場所というタグから、記憶の断片が再生されている可能性です。この場合、ココアさんは実際になにかを経験していることになります」

「その記憶を完全に取り戻すことって、できるんでしょうか」
「別の断片を引き出すためのタグを得ることができれば、取り戻せる可能性はあると思います」
「それで、ふたつめの可能性というのは」
「ふたつめは、デジャヴュ、です。……つまり、実は経験していないのに、その経験があったと錯覚している可能性です」
デジャヴュ、その可能性は、私もずっと考えていた。でも、それにしては再生される記憶の断片があまりにも鮮明だった。
「そして三つ目、並行世界における経験が、この世界のココアさんの記憶として再生されている可能性です」
「並行世界？」
本で調べたけど、並行世界はもしあったとしても、お互いに影響を与え合う

ことはできないんじゃ……

「この研究、まだ十分に再現ができていないために正式には発表できていないそうなんですが、並行世界は実際に存在し、ときに影響を与え合うことがあるという論文を読みました。その影響を与え合う現象のひとつが『神隠し』です」

「つまり、その影響で私の周りの人がいなくなっていて……でも神隠しって、ちゃんと、というと変ですけど、記憶に残りますよね。今起きているのって、私の記憶にしか残っていないみたいなんです。他の誰も、なにかを忘れているような感じがない」

「はい。この、並行世界が影響を与え合った時に、記憶自体も改変されてしまうことがあるそうです。元の世界の人もそうですし、別の並行世界へ行ってしまった人の記憶も。つまり、自分が並行世界へ行ってしまったことに気づかな

いまま、暮らしている可能性もあるわけです」
「私だけ、記憶が一部改変されずに残っている……？」
「そうなりますね。行ったことがあるはずの場所にそのものが存在しなかった経験って、過去にありましたか？」
「うーん、あったような、なかったような……」
「実はこの説の証明の難しさは、人は記憶を忘れやすいという点にあります。ほとんどの人は『気のせい』として片づけてしまいます」
「じゃあ、私の感覚も、気のせいなのかな」
「これは私の直感なのですが、ココアさんの記憶は本物なんじゃないかと思います。そういう気がします」
　そう言うと、青山さんが原稿用紙の束をくれた。
「私が話した考えは、この紙にまとまっていますので、よろしければ参考にし

てください。ココアさんの大切な人が見つかることを願っています」

「ありがとうございます」

「実は今日のラビットハウスでの執筆活動は、全部これに費やしてしまいました。でも大丈夫です。取材活動の一環です。それで、ちょっと言いにくいんですが――」

「なんでしょう？」

「今回の件が無事解決したら、私か、解決した先の並行世界にいるかもしれない『私』に、この経験を話してくださいませんか？　きっといい話が書けると思うんです～」

小説家らしい言葉で、青山さんとのディナー兼相談会はお開きとなった。

ラビットハウスに帰ると、カウンターにもふもふ毛玉がいた。

「それね、表に置いてあったの。タグに『ココアさんへ』って書かれてたから、きっとココアちゃんのファンからのプレゼントよ♪」

「念のため調べたが、怪しいものは入っていなかった。普通のかわいいぬいぐるみだよ」

タカヒロさんによるセキュリティチェックが済んでいるなら安心。さっそく自分の部屋に持っていった。そしてもふもふ。気持ちいい～

『――ええい早く放せ小娘が！』

『――私の腹話術です。早くコーヒー全部飲んでください』

今までで一番鮮明な記憶が蘇った。なんだろう、このラビットハウスで初めてコーヒーを飲んだ時にかわいい子に急かされたような……

その時、携帯電話が鳴った。怪しいメール。今度は画像だけ。コバルトブルーの制服を着た、ちょっと引っ込み思案そうな女の子。

『私はチノです。ここのマスターの孫です』
『じゃあココアさん、早速働いてください』
『お前は誰だ？　そんなの聞いてないぞ。怪しいやつめ』
『普通の女子高生だから信じろ』
『ココアお姉ちゃん……ですね』
『そう言えばその制服……私と同じ学校ね』
『あのね、入学式は明日なの』
『この白くすべらかなフォルム……はぁ～～……」
『カフェインを摂りすぎると異常なテンションになるみたいなの』
『チノー、このもこもこしたのかわいいなっ、倒したら経験値入りそう』
『チノちゃん羨ましいなー、こんな優しそうなお姉さんと一緒に暮らせて』

私は勢いよく立ち上がった。携帯電話が膝から落ちて床の上をはねた。なんでこんな大切なことをずっと忘れていたんだろう。アルバイト仲間のリゼちゃん、甘兎庵の看板娘にしてクラスメイトの千夜ちゃん、お嬢様オーラ漂う苦労人のシャロちゃん、いつも元気なマヤちゃん、トルネードがトレードマークのメグちゃん、そして私の大切な妹――

「……チノちゃん？」

はっと気づいて、携帯電話を拾い上げて連絡先の画面を急いで目で追う。ない……ない……ない……！　みんなの連絡先を交換し合ったはずなのに、それがなにひとつ見つからなかった。……嘘でしょ、ねえ。みんなの写真を一杯撮ったはずなのに、それさえもなにひとつ見つからなかった。なんで……なんで!?

部屋を飛び出して、表のお店の方に駆け込んだ。

「あらココアちゃん……どうしたの、何かあった？」
サキさんと鉢合わせして、その勢いのままにチノちゃんの写真を見せた。
「はあっ、はあっ、この子に……見覚えは、ありませ、んかっ!?」
「……いいえ、わからないわ」
サキさんの答えを聞いて、すぐに私は街に駆け出した。頭がぐるぐるしていた。みんながいない。どうして。よみがえった記憶を頼りに、まずはリゼちゃんちに行こうとして、
「わっ」
石畳で滑って転んでしまった。起き上がっても体にそれ以上力が入らず、近場のベンチに腰掛けたらもう動けなくなった。まだ春になったばかりで吹き付ける風は冷たく、頭が冷えるとともに、心さえも暗く、重く、冷たくしていった。

「へくちっ」

このままじゃ風邪をひいてしまいそうだった。でももう、どこへも動けない。

「ココア？」

「委員長……」

「……何があったかわからないけど、とりあえず帰ろ？」

委員長に連れられてラビットハウスに戻り、心配するサキさんにどうにか笑顔を作って、自分の部屋に戻った。

お風呂に半分沈んで、まだ私の頭の中はぐるぐるしたままだった。

みんなを探さなきゃ。でもきっと、この街にはいない。この街でないとしたら、どこにいるのか全く見当がつかない。青山さんが話してくれたことを思い

出す。もしあの話が本当なら、みんな並行世界に散り散りになってしまっているのかもしれない。

私が引っかかりを感じたところ、それはすべて、みんなとの思い出の場所だった。ラビットハウス、甘兎庵、フルール・ド・ラパン、リゼちゃんち、公園、ぜんぶ思い出がいっぱいある場所。

「チノちゃん……リゼちゃん……千夜ちゃん……シャロちゃん……マヤちゃん……メグちゃん……っ」

みんな思い出した。こぼれてくる涙が止められなくなった。

「ヒッ……うえぇぇ……」

もう何年ぶりだろうか、故郷の街を離れる時にも泣かなかったのに、今はもう限りなく涙が流れて、自分が溶けて消えてなくなってしまいそうだった。みんなどこかに行ってしまって、私はひとりぼっち。ひとりぼっちになっている

のがつらいし、みんなが散り散りになってしまったその先で、みんなひとりぼっちになっているのを想像するのもまたつらかった。

特に、寂しがりのチノちゃんが、どこか別のセカイで孤独になっているなんて、お姉ちゃんとしてとても耐えられなかった。みんなを……チノちゃんを助けなきゃ。

お風呂から上がり、髪を乾かして、ベッドに座った。ティッピーみたいなぬいぐるみを抱いて、青山さんからもらった原稿用紙の束をもう一度読み返す。この説が正しいなら、みんなが神隠しみたいに消えてしまっていて、それは並行世界が影響を与え合ったせいである可能性が高い。

みんなを助け出さないといけない。でも、どうしたらいいの。並行世界に行く？　どうやって？　行って、連れ戻せるの？　後ろ向きな考えばかりが頭を

よぎる。もうなにもかも手遅れで、どうしようもないんじゃないか。

でも。

携帯電話を開いて、チノちゃんの写真を見て決意した。
もう、泣いてばかりはいられない。
ひとりぼっちの闘いを、はじめよう。
みんな待ってて、お姉ちゃんが助けに行くから。

# 第三章　ひとりぼっちの魔法使い

(World Line Kigumi-F)

みんなを助けると決意はしたけど、なにをしたらいいかわからなかった。ひとまず思い出したことを全部ノートに書き出すことにした。また忘れてしまうことがないように。

まず、私自身を再確認。保登心愛(ほとここあ)、誕生日を過ぎたので十八歳の高校三年

生。この時点で、すべてを思い出す前の私と食い違いが起きていた。この世界の私は十六歳、高校入学のためにこの街に来てまだ一か月しか経っていない。お姉ちゃんとお兄ちゃん二人、お母さん、お父さんの六人家族。家はパン屋さん、自分で言うのもちょっと恥ずかしいけど、美味しさは一番！

私の大切な妹・チノちゃん。名前は香風智乃。十五歳の中学三年生。タカヒロさんの一人娘にして、ラビットハウスの看板娘。出会ったばかりの頃は無口で笑顔をみせてくれなかったけど、次第にとてもかわいい笑顔を見せてくれるようになった。チェスとパズルとボトルシップが趣味。

ラビットハウスで働く先輩・リゼちゃん。名前は天々座理世。十八歳の高校三年生。初対面で命のやり取りをした……というのは冗談だけど、下着姿のリゼちゃんに銃を向けられたのがいい思い出です。かわいいもの好きなところにシンパシーを感じるよ。

ラビットハウスの良きライバル・甘兎庵の看板娘である千夜ちゃん。名前は宇治松千夜。私と同い年で高校一年、二年と同じクラスだった。千夜ちゃんの作った栗羊羹に引き寄せられてお友達になりました。

千夜ちゃんの幼馴染・シャロちゃん。名前は桐間紗路。同い年で同じ学年。ごきげんようがあいさつになっているお嬢様学校の特待生で、アルバイトを掛け持ちしつつ慎ましやかな生活をしている苦労人。陶磁器に目がなく、コーヒーカップなどを見て気に入るとつい買っちゃう。リゼちゃんが大好き。

チノちゃんのクラスメイトその一・マヤちゃん。確か名前は条河麻耶。元気いっぱいの私の妹！　チノちゃんいわく、頭が良くて、お嬢様学校に進学することになっている。

チノちゃんのクラスメイトその二・メグちゃん。名前は奈津恵。メグちゃんも私の妹です。おうちがバレエ教室で、メグちゃん自身もバレエが得意。マヤ

ちゃんともどもお嬢様学校に進学する。

チノちゃん・マヤちゃん・メグちゃんの三人組を、リゼちゃんは「チマメ隊」と呼んでいた。

タカヒロさん、青山さん、凛ちゃんさん、千夜ちゃんのおばあちゃんは、私が知っている姿と変わらなかった。問題はティッピーと……サキさんだった。

ティッピー――チノちゃんの頭を定位置にしているうさぎさん。もふもふしている。ダンディな声で話すのはチノちゃんの腹話術だった。ティッピーはこの世界のラビットハウスにはいなかった。

そしてサキさん。私の元の世界の記憶にはいない人。この世界でタカヒロさんと夫婦になっていて、顔の感じがチノちゃんに似ているということは、元の世界ではすでに亡くなっている、チノちゃんのお母さんなんじゃないかな。

次に、私の認識と食い違っている時間経過の整理をしよう。私の記憶にある

のは、高校二年から三年になる間の春休みの記憶が一番新しい。来週から木組みの街を出てみんなで旅行に出かけることになっていた。ところが、今私がいるのは、高校一年の春。だいたい二年の食い違いが起きている。もしこれが並行世界への移動のせいで起きたなら、みんなのいる並行世界の時間もバラバラにずれている可能性が高い。

ノートがだいぶ埋まった。夜も遅いことだし、今日はこのあたりまで。明日は月曜日。

朝。サキさんに起こされた。目覚ましを止めて二度寝してしまっていた。遅刻にはならないので大丈夫だったけど。高校に来て、私の中では、今いる世界の記憶と元々の世界の記憶が共存していることに気づいた。クラスの名簿を見ると、千夜ちゃんがいなくて一人減っていることを除くと、全員が元々の世界

の記憶通りだった。……なんで自分の中で二年前のことを覚えているかって？　記憶力にはちょっと自信があるのです、えへん。でも歴史年表は覚えられなくて成績が良くないのです……

授業の時間中、どのようにしたら並行世界へ行くことができるかを考えていた。そうしていると、不意に肩をたたかれた。

「保登さん。授業に集中してくださいね」

「――えっ、あっ、すみません」

当てられていたのに気づかなかった。幸い私には元の世界で授業を受けた記憶がある。つまり一年生の最初の方の授業なら楽勝……あれ？　この英単語の意味なんだっけ？

結論。元の世界に戻ったら英語や国語を復習しよう。

その後はきちんと授業を聞き、放課後を迎えた。

「おうおう嬢ちゃんちょっとツラ貸しな」
「ピッ！　いきなり怖いよ！」
「アハハ、まあちょっと付き合ってよ」
「わかった！」
委員長ほか、ふたりに誘拐？　されちゃいました。
四人でお洋服屋さんや雑貨屋さんなどをウィンドウショッピングして、でもアルバイト代はまだ入ってないからちょっと我慢して、街を歩き回ること小一時間。そろそろ足が疲れてきたので喫茶店に行くことになって、
「委員長がフルールで、ココアちゃんがラビットハウスだったよね？　じゃあそのふたつ以外のお店を敵情視察しに行こう！」
「賛成！」
という、喫茶店組以外の意見で行き先が決まりました。そういえば元の世界

でも、千夜ちゃん以外の学校のみんなを連れてきたことはなかったなあ……。
近くにあった個人でやってるお店に入り、それぞれコーヒーを頼んだ。今日はカプチーノにしようかな？　タカヒロさんみたいにダンディなマスターが、一杯ずつ丁寧に淹れてテーブルに届けてくれた。
「うーん、おいしい！」
「喫茶店のアルバイトにしては、ずいぶんあっさりした感想ね……」
「えへへ」
「まあ、ココアらしいといえばココアらしい」
「一応いろいろと考えながら味わってはいるんだよ？　時々淹れるお仕事もするから、技術を養ってるんだー」
「ちなみに、どのくらい技術は身についた？」
「サキさんから『もっとうまくなる素質があるわ』って褒められたんだ、えへ

へへへ」
「自分で飲んでみた感想は」
「……」
目をそらした。いろいろと察されちゃった。もちろんお客様にお出しできるレベルにはなったんだけど……チノちゃんにはダメって言われそう。
「……うん、やっぱり。ココア、悩みがあるでしょ。それも特大の」
「え、そそ、そんなことないよっ」
なんでばれてるの!?　顔に出てた？
「その顔は嘘をついている顔ね。泣いた跡が隠しきれてない」
「これは昨日ごはん作るときに玉ねぎをたくさん刻んだからで……」
「授業でもうわの空だった」
「今日のごはん何にしようかなって……」

「お昼ごはん食べた直後にも考えるの？」
「う……」
みんなに心配かけちゃいけないと思って、なんとか取り繕おうとしたけれど、失敗……。
「まあさ、人に言いにくい悩みだっていっぱいあるけどさ、せめて気を紛らすくらいはさ。たとえばうさぎをモフるとか」
「うん……」
「なにか話せることがあったら、いつでも相談してね？」
「ありがとう……」
喫茶店からの帰り道、委員長と私だけになったときに尋ねてみた。
「ひょっとして、私のため？　今日みんなで遊んだの」
「いつも明るさ八十五パーセント、憂い十五パーセントくらいのココアが、憂

い七十五パーセントくらいになっていたから」

「やっぱり、わかっちゃうんだ」

「そりゃあね、ココアは明るさと嬉しさが全身からあふれ出しているのが普通だから。誰でも分かると思うよ？」

そんなココアが大事だから、笑顔になれるためならなんでもするよ。委員長はそう言ってくれた。かなりうるっと来た。

夜、昨日いっぱい書いたノートを読み返した。この世界の木組みの街をいろいろとめぐって、みんなの手掛かりを探し出そう。

寝ようとしたとき、また携帯電話にメールが入った。ちょっと前に見たのに似た、大部分が文字化けした変なメール。でも、前回より読める部分が多くなっていた。

『これが三十五回目の送信になります。私は（私も？）保登心愛です。これだけだと怪しさ満点のメールにしか見えないと思うのですが、騙された気になって読んでね！』

「何、これ……？」

新手の迷惑メールなのかな。でもそれだとメールアドレスだけじゃなくてフルネームももれちゃってることになるよね。続きを読めと言われたが、その肝心の続きがかなり文字化けしていた。ひとまず読める部分を拾い読みしていくことにした。

『……みんなは並行世界にいて、そっちの私がいる世界にはみんなはいません』

『助けられるのはあなただけ。……困ったときは青山翠さん、そっちだと青山ブルーマウンテンさんという方がとおりがいいかな？　彼女に相談すると万事うまくいくと思います。』

『こちらからも電子メール？（っていうんでしたっけ？）と電話？　でサポートしていきます』

まるで今の私が置かれている状況を見抜いているかのような、私を名乗る誰かからのメッセージ。怖くなって思わず携帯電話を投げそうになったところに、突然着信があった。画面に表示された番号は普通の番号のようであって、でも間に変な記号が入っていたりして、ますます怖くなった。……でも、もしこの電話がこのメールの主からで、そしてメールに書いてあることが正しかったら、みんなを、チノちゃんを見つけ出す有力な手がかりになるかもしれない。そう思って、勇気を振り絞って電話に出てみることにした。

「……もしもし？」

『あ、やっとつながったー！　……コホン、そちら木組みの街の保登心愛さんでお間違いないでしょうか』

私に似たような、ちょっとだけお姉さんになったみたいな声が聞こえてきた。

「はい、そうですけど……」

『はじめまして。私も保登心愛です。あなたのいる世界とは違う、並行世界の、だけど』

並行世界の私？　ココアさん？　は、自分と同じ名前を名乗った。でもそれだけでは、私の名前を知っているただの他人である可能性が高い、というか99.99％その可能性しか考えられなかった。

『といってもいきなり信じられないよね。ま、怪しいお姉ちゃんがしゃべる怪

しい物語と思って聞いてくれるかな？　そちらの世界でいう電話代？　はかからないし』

『まず、改めまして保登心愛です。私の世界でも実家は大人気のパン屋さんを営んでいます。年齢は二十五歳、あなたより確か七歳年上ね。そちらの世界線的には私の世界と十年差があるけれど』

「なんで私の歳を」

『知っているか、でしょ？　詳しい話はおいおいするけれど、ひとまず私はあなたのことを詳しく知っている、ということにしてね。街の国際バリスタ一流スパイ弁護士アンド時空エンジニア、なんてね』

ココアお姉さん（仮）の話が始まった。

『私の世界では科学技術がかなり進んでいて、並行世界の観測も最近になってできるようになったの。観測できるだけで移動とかはできなくて、こうして連

絡を取り合うことも私の独創的技術力をもってして初めて可能になったんだけどね、えへん』

「すごいですね……」

『その声はなにひとつわかっていない声だね？　でもお姉ちゃん許しちゃいます。こうして並行世界の私ときちんと話せたのは嬉しいから！』

『それで、私があなたに連絡を取ろうとしたのは、あるイレギュラー事象を一か月前に観測したから。この世界、世界線の群は、何かあるたびに枝分かれをして、その先に交わることはないんだけど、一か月前に、あなたのいる世界がほかの複数の世界線と交錯……というか衝突したんだ。その際に、あなたの大切な妹たちやお友達が巻き込まれて、バラバラの世界線に散ってしまった』

「ちょっと待ってください。その、世界が衝突したとかなんとかって」

『ひとまず、今のところの理解は、みんながあなたの世界からいなくなってし

まったけど、別の世界で生きている、という感じでいいよ』
「やっぱりみんないなくなっちゃったんですか」
『そうね』
「その、私の世界の青山さんにも聞いたんですけど、並行世界って本当なんですよね」
『ええ』
「でも、移動はできないって」
『できない』
「じゃあ、みんなはどうなっちゃうんですか⁉　もう二度と会えないってことですか⁉　……そんなの、やだよ……みんな……チノちゃん……」
『希望は、あるよ』
「なんですかっ」

『それは、あなたとあなたの世界だけが可能かもしれないことだと思う。世界の衝突というイレギュラーな事象とその影響に対するカウンター。まず、あなたの世界から消えてしまったものを見直してみるといいかも』

「……わかりました」

『これからの事態はとても解決が難しいものだと思うんだ。でも、私の方から最大限サポートをするし、あなたの世界の青山さんはとても頼りになる人だから』

「その、みんなを助けられるんですよね」

『うん。あなたなら、きっとできるよ。いつものあのセリフ、言ってみよう?』

「お姉ちゃんに、まかせなさーい……っ」

また、目の端から涙がこぼれた。昨日誓ったはずなのに、この戦いはひとりぼっちだって。そのときよりも事態は少しよくなった。助けになる人が二人増

えた。でも怖い。もし助けられなかったら。自分がこの世界でただひとり生きていくより、みんながそれぞれの世界でひとりぼっちになっていることのほうがつらかった。

『そう、あなた……いいえ、私たちはみんなのお姉ちゃんだから、みんなの笑顔を守るために、できることをしていこう』

「うん……」

『さて、まだ時間ある？　よかったら、ちょっとお姉さんの話聞いてくれない？』

「その、明日学校なので、少しだけなら」

『一日くらい休んじゃえ！　……とはいかないか。私たちって一見底抜けのバカみたいに見えて、真面目なところあるしね』

「人から言われるとちょっと恥ずかしいな」

『ま、根を詰めすぎないようにやっていこうね。それで、私は一応街のバリスタ弁護士になったよ！　でもね、ちょっと聞いてくれる？　事務所の上司がね――』

ココアお姉さん（仮）の世間話のような、仕事の愚痴のような一方的なお喋りはそれから一時間近く続いた。ちょっと疲れたけど、久しぶりにちょっと笑えた気がした。

翌朝、目覚ましでは起きられず、サキさんに起こされた。時間に余裕を持って起こしてくれたので、パンをくわえて高校まで走るような真似はせずに済んだ。この前読んだ本では、曲がり角で何かとぶつかって異世界に飛ばされちゃってたから、ちょっと試そうかなと思ったのは内緒。うっかり、本当に知っている人が誰もいない世界に行っちゃったら困るから。

まず、昼休みに校舎の中を探検することにした。千夜ちゃんにつながる手がかりがどこかにあるかもしれない。私と千夜ちゃんはだいたいいつも一緒にいたから、私の知っているどこかにあるはず。教室、家庭科室、音楽室、図書室、体育館、探すところは結構多そうだった。ただ、休み時間のうちに入れるのは図書室くらい。まずは図書室かな。

図書室は結構広くて、本も多い。全部を見ていくようでは夏休みになってしまう。できれば千夜ちゃんが読みそうな本から先に当たりたい。千夜ちゃんは結構本を読んでる感じだったから、何かいい絞り込みは……

棚をめぐっていると、ふと一冊の本が目にとまった。『奇抜なネーミング指南』……千夜ちゃんのすごいネーミングって、こうした本を参考にしてるのかな？　本をぱらぱらとめくってみていると、ページの間からノートの切れ端が落ちてきた。

「お団子の言い換え……珠……真珠、宝珠。新メニュー名称案……」

中身がとても千夜ちゃんっぽい。手書き文字のかわいい感じも千夜ちゃんに似ていた。いきなり手掛かりを拾えて我ながらびっくりした。これを使って何を見つけられるかは全くわからないけど、今は何でも集めておきたい。みんながいなくなったこのセカイで、みんなが確かにいたことの証明が得られた気がした。

夜。今日手にすることができた手がかりひとつを、ノートに貼り付けた。一歩前進。とはいえ、まだ千夜ちゃんを見つけ出すには手がかりが足りない。ほかのみんなもまだ居場所がわからない。今週末あたり、青山さんにまた相談してみようかな。

残りの平日、新たな手掛かりは見つからなかった。

土曜日、今日は一日ラビットハウスでお仕事の日。サキさんとふたりでホールに立ち、お客さんをおもてなし♪　……するんだけど……

「今日は閑古鳥が鳴いているわね♪」

「サキさん笑ってる場合じゃないですよ……」

お昼どきになっても、まだお客さんは三組め。お客さんが来ない間に磨き上げていたテーブルやカウンターは、さらに輝きを増していた。

「ココアちゃんが来る前みたいね。もう今日はお休みにしちゃおうかしら」

「あら～今日はお休みなんですか？」

「青山さん！」

本日四組めのお客さん、青山さんの登場。

「こんにちは～サキさん、ココアさん。今日もお世話になります～」

「いつもひいきにしてくださってありがとうございます♪」
「ありがとうございます！」
「いえいえ～」
青山さんをいつもの席にご案内した。
「ご注文は？」
「ブルーマウンテンをお願いします～、あとココアさんも」
「店員さんのご指名は受け付けておりません～」
私が笑いながらそのように返すと、カウンターからサキさんが「いいわよ～今日のココアちゃんは青山さん専属ね♪」と声をかけられた。青山さんに誘われるまま、向かいに座った。
「少し、手がかりがつかめた感じの顔ですね」
「！　……やっぱり、青山さんはすごいです」

「うふふ♪」

「実は、ココアさんからインスピレーションを受けまして、もうひとつ新しい作品を書き始めまして～」

「どんな話ですか？」

「まだ内緒です～、出来上がったら、ココアさんに第一にお見せしますね、あ、でも私が見せる相手のココアさんはココアさんじゃないかもしれないですね」

先日、青山さんとディナーをご一緒したときに話した中身が思い出される。青山さんの説が正しかったら、私と、今向かい側にいる青山さんとはいつか出会えなくなるかもしれなかった。……私がみんなを探しに並行世界へ行くことによって。

「あるいは、私の仮説と違う説があって、それが正しいものだとしたら、ココアさんと私がこの先何度でも出会える可能性はあります」

「なんか、難しいですね」

「ええ、なかなかに難しいものです。でも私、とてもわくわくしているんです〜」

傍観者ゆえの感想かもしれませんが。そう言って青山さんは微笑んだ。

「私は、ちょっとどきどきしているんです。みんなに……私の大切な友達と妹を探せるかどうか……そう、青山さん、私、思い出しました」

そうして、私は思い出したことを青山さんに話し始めた。私の大切な妹、ここで一緒に暮らしているはずのチノちゃん。ラビットハウスのアルバイト仲間でちょっと軍人さんみたいなリゼちゃん。甘兎庵の看板娘で同じクラスの友達、千夜ちゃん。苦労人だけどいつでも気品を忘れないシャロちゃん。いつも元気な友達思いのマヤちゃん。おっとりぽやぽやバレエが得意なメグちゃん。もふもふのティッピー。みんな大切な仲間。

「みんな、このセカイにはいないんです。だから、探しに行かなきゃ」
「なるほど……なにか、手掛かりは見つかりましたか？」
「まだ、ひとつだけですけど。千夜ちゃんが書いた和菓子の名付け方メモが見つかりました」
「こうした手掛かりが、並行世界をまたいでみなさんを探す際のキーアイテムになることが多いようです。千夜さんの手掛かりがつかめたということは、他のみなさんの手掛かりもおそらくこの街に散らばっていると思います。一斉に見つかるかもしれませんし、一人見つけるごとに、また新たな一人分の手掛かり見つかることもあるかもしれません」
「青山さん、本当に何でも知っているんですね」
「いいえ～、今まで読んできた本の受け売りです～」
「それで、並行世界に関することで、少し気になることがあるんですけど」

「なんでしょう？」

「実は、並行世界の私から連絡が来たんです」

青山さんの目がきらりと輝いた。

先日のココアお姉さん（仮）の話をした。私よりも年上で、街の国際バリスタ一流弁護士アンド時空エンジニアで、みんながいなくなってしまったことを知ってて、みんなを助け出すためのヒントをくれて、私を励ましてくれた。

「なるほど。その並行世界のココアさんの言葉が正しいなら、やはり並行世界は実在するんですね」

とても興味深いです。そう言うと青山さんは原稿用紙に何か図を描き始めた。ココアお姉さん（仮）が話した並行世界の説を図解しているみたいだった。

「まず、並行世界のココアさんのいる世界線をαとおきましょう。この世界線は私たちのいる世界線から十年進んでいるようです」

一本だけ他の線と交わらないように描かれた直線を指さし、そこにαと書いた。

「そして、ココアさん、私、ココアさんのお友達と妹さんがみんな一緒にいた世界線を……そうですね、木組みの街世界線としましょう」

途中で枝分かれしている線の根元に「Kigumi」とメモ。

「みなさんがバラバラになった世界線ですが、ひとりずつバラバラになっている場合で考えてみましょう。ココアさんと私がいて、みなさんがいない世界線を「Kigumi-F」にしましょう」

木組みの街の線から六つに分かれた線のひとつめに、Fと書く。

「先生、ひとつ質問です」

「はいなんでしょう」
「なんでFからつけたんですか？」
「これは私の仮説なんですが、今回のように世界線が衝突して分岐した場合、世界線が分かれたまま進行する場合と、再合流する場合と両方ありそうな気がしました。今回はみなさんと出会っていくたびに世界が合流する説を考えています」
　みんながバラバラになってしまったセカイ、分岐しきってしまった世界を、元の世界線を含む七つの世界線の最後、Fとしました。そう言って青山さんはコーヒーを口にした。
「ひとり出会うたびに世界線が合流し、最後のひとりと出会ったら元の世界線に復帰する。そんな感じではないかと思っています」
「うーん、わかるような、わからないような」

「私にもまだわからない点が多々ありますので、説明がつたないものになってしまっていると思います」
「そのあたりは、並行世界αの私にも聞いてみることにします」
「それがいいと思います～」

「あとね、青山さん」
「なんでしょう？」
「もともとの私、みんなととてもフランクな感じでお付き合いしてたのも思い出したんだ」
「そうですね～、ココアさんはいつでも明るくくだけた感じがとてもココアさんに似合うなって思ってました～」
「うん、ここ最近悩んで、泣くことも多くって、学校のお友達からも結構心配

されてたんだ」
「雲に隠れたお日様みたいでしたものね」
「まだ少しだけど、みんなにたどり着く手掛かりがひとつ見つかって、ようやく希望を感じられた」
そう、ようやく希望をつかめたんだ。
「だから、希望がどこかに逃げちゃわないように、みんなを笑って迎えられるように、これからいつでも笑顔でいようと思うんだ」
「そうです、その意気です、ココアさん」
「青山さん……」
うっかり泣いちゃいそうになるのをこらえて、お日様のように。
「ありがとう！　これからもよろしくね！　絶対みんなを見つけ出して青山さんに紹介するから！」

「ええ、楽しみに待ってます」

日曜日、ラビットハウスで働くのはお休み。今日もみんなの手掛かりを探して街を歩き回ることにした。行き先はどこにしようかな。千夜ちゃんちに行ってみよう。

甘兎庵に行くと、千夜ちゃんのおばあちゃんが出迎えてくれた。

「この間の鯱スペシャルの子だね。よく来たね」

「はい！　また来ました！」

「今日は何にするかい？」

おしながきを見ながら考えていると、ふとあるメニューに目が留まった。

「おばあちゃん！　この『千夜月』ってなんですか？」

「なんだと思う？」

もし元の世界と同じであるなら、私はもうその答えを知っている。同じであってほしい。なかば祈るように、答えを口にした。

「……栗羊羹、ですか？」

「どうしてそう思う？」

「羊羹のあんの中にころころとある栗の姿が、まるで夜の世界に……ぽっかりと浮かんだ月のようで、そしてその月ははるか昔から、千の夜を越えて今も輝き続けている。お店が生まれたその時から、ずっとあり続けるこのお菓子は、まさに千の夜を経た月にも等しい」

「……お嬢ちゃんはまるでうちの娘みたいな才能があるね。これからはお嬢ちゃんの語りを宣伝文句にするよ」

「ということは……」

「栗羊羹で正解さ。今日は一本おごりだよ」

「うれしい！　あ、じゃあそれとこの『新緑の輝き』ください！」
「今日も大食いだね、カカッ」
　しばらくして運ばれてきたのは、栗羊羹まるまる一本と、小さいどんぶりくらいの大きさがある抹茶プリンだった。
「ところでおばあちゃん、おばあちゃんの娘さんって？」
「ああ、あの子、千鳥っていうんだがね、世界中を忙しそうに駆け回ってるよ。いわゆるキャリアウーマンってやつさ。たぶんあの調子じゃ結婚する気はなさそうだね。まあ、後継ぎは今修行中の弟子がいるから大丈夫さ」
　千夜ちゃんのお母さんになるであろう人が独身だと、このセカイには千夜ちゃんがいない説がますます確実になってくる。
「ただね、だいぶ昔にもし結婚して子どもが生まれたら、みたいな話をして、その時にあの子が言ったのさ、もし女の子を授かったら」

名前を千夜にしようってね。

その一言に、私は思わずスプーンを落としてしまった。

「大丈夫かい？」

「あ、はい、その、びっくりしちゃって」

首をかしげるおばあちゃんに、大丈夫だと伝えた。本当はびっくりしすぎて大丈夫じゃなかったけど。

「……千夜って名前、実は、私の大切な友達と同じ名前なんです。その子も和菓子屋さんの子で、初めて会ったときに栗羊羹をくれました。実は同じ学校だとわかって、クラスも一緒になって、ずっと仲良く楽しく過ごしてたんですけど、でも、今はちょっと遠くに行っちゃってて、行った先もわからなくて、だ

から探さなくっちゃって、そう思ってるんです」

「そうかい……」

おばあちゃんは深くうなずき、私の頭に手をぽんと置いた。

「探すのは大変だろうね。でも、この広い空の下、どこかで元気に生きているなら、必ず会えるものさ」

「おばあちゃん……」

励(はげ)ましの言葉に、なんだか心がぽかぽかしてきた。

「さ、お食べ。腹ごしらえして、それから探すんだよ」

「ありがとう、おばあちゃん！」

甘兎庵を出て、隣のシャロちゃんちを訪問……したんだけど、もちろんシャロちゃんはいなかった。そこに人が住んでいる気配は何もなく、よく見ると扉

の所に借りる人を募集していると書かれた張り紙があった。こっそり庭のほうを見に行くと、ハーブが植えられた花壇があって、その近くに見慣れたうさぎさんがいた。

「ワイルドギース！」

シャロちゃんの相棒、ワイルドギースがいたよ！　なんとなくおさむらいさんみたいな雰囲気を感じる、クールなうさぎさん。今日もハーブの葉っぱをくわえて決めていた。ひょっとしてワイルドギースも何かの手掛かりになるのかな？　でもうさぎさんを勝手に連れて帰っていいものかどうか……

少し考えて、ワイルドギースはそのままシャロちゃんの家の庭にいてもらうことにした。また元の花壇のそばに戻すと、ぴょこんぴょこんと、まるで私についてこいというように、家の裏手に隠れた。その後を追って裏手に回り、ワイルドギースが立ち止まっていた所のそばを見ると、なぜかティーカップがひ

とつ、地面に転がっていた。
「なんだろう、これ……？」
地面に落ちているにしては、とても綺麗だった。まるで何者かがついさっきここに置いたみたいに。ちょっと怖くもあったけれど、シャロちゃんにつながる手掛かりとしては有力だった。一応、持って帰ることにした。

その足で今度はリゼちゃんの家に向かった。この街の中でも大きいお屋敷を目指していけばたどり着ける。記憶を完全に取り戻す前にも行ったので、道は覚えていた。
立派なお屋敷。リゼちゃんのお父さんは軍人さんって聞いた記憶がある。でもそれだけじゃお屋敷は建たないって、うちのお父さんが言っていた気がする。もう軍人さんをやめて新しいビジネスをしているのかな。……ちょっと

待った、今はお屋敷のこととかリゼちゃんのお父さんのお仕事のことはとりあえず置いといて。まずはどうやって話を聞くかだよ。門のところには今日もいかつい黒服のお兄さん？　おじさん？　が立っていた。黒服の人たちはやさしかったけど、おうちの秘密は絶対にしゃべらない気がした。こういうときの手段はひとつあるんだ。

「いらっしゃいませ」
「こんにちは！」
「空いているお席へどうぞ」
お屋敷からほど近い喫茶店に来た。ちょうどお客さんがひと段落したころで、私のほかにはあと二、三組だけ。ホールの店員さんも少し手持ち無沙汰みたいだった。これはチャンス。

「ご注文は何になさいますか？」
「えーと、オリジナルブレンドコーヒーと、サンドイッチをお願いします！」
「かしこまりました」
しばらくして運ばれてきたコーヒーを一口。うん、おいしい！　でも細かい味わいを語るにはもっと修行が必要だね……チノちゃんにただのカフェイン中毒だって言われないように。サンドイッチもいいお味。ピリリと効いたマスタードがいいアクセント。でも、パンはうちのお母さんとお姉ちゃんが焼くパンのほうが上だね！
「店員さん店員さん」
「お呼びでしょうか」
「コーヒーとサンドイッチ、すごくおいしかったです！」
「ありがとうございます。その言葉、ぜひあちらのマスターに直接おっしゃっ

てください。とても喜びます」

私がマスターのほうに向かおうとすると、マスターのほうから私の席にやって来てくれた。

「ありがとうございます、お嬢さん。おいしく味わってくれたようで何よりだよ」

「はい！　うちも負けていられないという気持ちになりました！」

「おや、お嬢さんの家も喫茶店を営んでいらっしゃる？」

「私、今年の春にこちらに来たばかりで、お世話になっている下宿先が喫茶店なんです」

「お店のお名前をうかがってもよろしいですか」

「ラビットハウス、っていいます」

「ああ、香風さんちですね。会合の折によくお会いしますよ」

「私、そこでお仕事もしているので、まだ勉強の途中なんですけど、頑張っていきます！」
「ええ、ぜひ頑張ってください」
「ありがとうございます！　ところで、一つお尋ねしたいことがありまして……」
「何でしょう」
「実は私、こちらで人探しもしているんです。ちらりと聞いた話では、この街のお屋敷に住んでいる、みたいな」
「ふむ……この街でお屋敷というと、青山さんのお宅と、すぐそばの天々座さんのお宅くらいですかな」
「探している人は、私と同じくらいの歳で、高校生なんですけど」
「高校生、ですねえ。天々座さんのところは息子さんでしたら成人して遠く

の街にいらっしゃると聞きますが、お嬢さんがいらっしゃる話は聞きませんねえ」

「そうですか……じゃあ人違いというか街違いなのかな……」

街違いというか、おそらくセカイ違いかもしれなかった。

「人探しは大変なものです……私も若い頃に離れ離れになった友人がおりまして、あのときは再開するまでに十年かかりました」

「そんなにですか！」

「まあ、それでも会えたのですから僥倖（ぎょうこう）です。十年という月日も、若いころにはとてつもなく長く感じたものでしたが、おいぼれにとっては一瞬です」

「はい……」

「縁あるもの、必ず出会うことができるでしょう。そうだ、少々お待ちください」

カウンターの向こうに戻ったマスターが、ティーポットとカップとともに戻ってきた。

「お茶を一杯差し上げます。名前は『テデザリゼ』、まず香りをお楽しみください」

リゼちゃんと同じ名前のお茶が出されたことに、なにか運命みたいなものを感じながら、そのお茶を味わった。

「とてもおいしいです！」

「ささやかですが、茶葉を一袋差し上げましょう」

「ありがとうございます！」

マスターが去ったあと、店員さんが通りかかって耳打ちした。

「あなたすごいわね、初対面でマスターからプレゼントをもらうなんて」

「そうなんですか」

「敬語じゃなくていいよ。私も高校生だし。しかも同じ学校だと思う」
「そうなんだ！　よろしくね！」
「よろしく」

同じ高校の店員さんに見送られて、お店を後にした。このセカイにはリゼちゃんもいない。この感じだと、やはりマヤちゃんもメグちゃんも、そしてチノちゃんもいないのだろう。でも、少しずつ存在のかけらめいたものが見つかってきている。それは、確かにこのセカイがみんなとつながっていることの証（あかし）のように思えた。

その日の夜、ココアお姉さん（仮）から連絡が来た。
『やっほーっ、しばらくぶりだね！　何か変わったことはあった？』
「うん、みんなにつながる手掛かりになりそうなものを、少し見つけられた

んだ」
『ほうほう、どんなもの？』
「千夜ちゃんが作った、和菓子のネーミング指南書とか、千夜ちゃんの名前を千夜ちゃんのおばあさんから聞いたりだとか、シャロちゃんが愛してそうなカップとか、リゼちゃんと同じ名前のお茶の葉とか」
『ふむふむ。どんな感じに役に立ちそうかな……やっぱり魔術触媒かな』
「まじゅつしょくばい？」
『あ、いやこっちの話。その手掛かりが役に立ちそうって話』
「ほんと⁉」
『ほんと』
「みんなが見つけられるんだね！」
『そのためには、もうちょっと準備が必要かな』

「どんな準備？」
『ほら、ラビットハウスにはティッピーがいるでしょ？　そっちのセカイのラビットハウスにはまだティッピーがいないんだよね？』
「うん……」
　大切な仲間であるティッピーが、このセカイではその姿がない。
『すべてを始めるために、まずはティッピーが必要だと思う』
「それじゃあ、ティッピーを探せばいいんだね⁉」
『うん、こちらからの探索の成果によると、街の大きな公園にいる、アンゴラウサギの群れのどこかにティッピーが隠れているらしいの』
「ティッピーはもふもふだからすぐ見つけられるよ！」
『それがね……もふもふのアンゴラウサギが二百羽いるらしいんだ、その公園に』

「二百羽!?」

思わずのけぞって、ベッドに倒れこんだ。公園の二百羽のアンゴラウサギの中から一羽を見つけ出せって、それは無理な話なのでは……ウサギはすぐぴょんぴょん飛び回っちゃうし……

「どうしたらいいかな」

『あなたなら、きっと見つけ出せると思うな。そう確信してる』

「その確信はどこから……?」

『詳しくは後で話すけど、それだけの力をあなたは持っている。だから大丈夫』

ココアお姉さん（仮）の言葉を、今は信じてみよう。隠された自分の力とやらで、ティッピーを見つけ出してみせる。

次の日、月曜日は放課後が待ち遠しかった。本当なら高校をお休みしてでも公園に行きたかったけれど、それは自分が許さなかった。しかし、授業の時間も昼休みも上の空になっていたらしく、委員長たちからまた心配されちゃった。先生から当てられなかったのは幸運だったかもしれない、と思っていたら、

「いやいやいや、物理の時間に先生から当てられてもココアが微動だにしなかったから、先生が諦めちゃったんだよ」

「ええっ!?」

「自分で驚いてどうする。先生さっきしょんぼりして物理準備室に帰っちゃったよ」

「私ちょっと謝ってくる！」

急いで物理準備室に向かい、部屋に入ろうとしていた先生を捕まえた。

「先生ごめんなさいっ」
「あ、保登さん……授業中ずっと上の空だったでしょ」
かわいいお姉さん先生にジト目でにらまれて恐縮した。
「その、いろいろと悩み事……というか、気になっていることがいろいろあって、先生にもちょっと聞いてみたいことがあります」
「そう？　準備室寄ってく？　今日は他の先生いないから」
「寄ります！」
お姉さん先生は、一学期最初の物理の授業でタイムマシンのことなどを話してくれた先生だ。なんとなくだけど、この先生なら、私が今直面している問題について、青山さんとは別の視点から答えをくれそうな気がした。
「それで、聞きたいことって？」
「先生、最初の授業の時に量子力学とか、タイムマシンのこととか話してくれ

ましたよね」
「ええ」
「その、並行世界って、信じますか」
みんながいないことと、青山さんの仮説をそのまま喋ると変な子だって思われるのが怖かったから、そことなくＳＦ小説の中身みたいな感じで話すよう心掛けた。いきなり、自分の友達が並行世界に飛ばされちゃったんです！　なんていっても絶対信じてくれないから。私が現状について話し終わると、
「ふむ、結構壮大な話だね、これは」
「はい」
「まあ、物語的に問題が解決されるなら、そこは魔法でも何でも使って、並行世界から人を呼び戻す、みたいな展開になるとは思うけど」
「物理学的にはどうなるんでしょう」

「エヴェレットの多世界解釈に準じると、多数の世界線は並行して存在しているものの、お互いに干渉はできないとしているね。つまり、もし並行世界に人が散らばる、すなわち、各人物が存在する世界線と存在しない世界線が生じている場合、存在しなくなってしまった人を存在するように戻すことは、できないと考えられる」

「そう……ですか……」

先行きが不透明になってきた。物理学的に、みんなと再会することができない可能性が生まれてきてしまった。

「コペンハーゲン解釈の立場に立ったＳＦであるなら、各人物が存在する世界と、存在しない世界が重ね合わせの状態で存在していて、それが観測によって、各人物が存在しない世界になった、という筋書きを書くことができそうかな。私の勝手な考えでは、ここでタイムマシンを持ってきて観測前に戻り、各

人物が存在する世界を観測し直す、なんてものも面白いとは思うけれど。でもタイムマシン自体が実現困難で、自分の求める世界を任意に観測し直すと言ったことが可能なのかどうか……あ、ごめん、マニアな血が騒いじゃって」

「いえ、参考になります！」

「うん、ところでこの小説、なんか続きが気になってきたんだけど、まだ出てないんだっけ？」

「はい、そろそろ出るとは思うんですが」

続きどころか、最初の巻すら存在しないんだけどね。

「そっか、今度本屋さんで探してみようかな」

先生とずいぶん長い時間話をしていたらしい。外はもう真っ暗になっていた。すでにみんな帰って真っ暗になっていた教室からかばんを回収して、戸締りをして帰った。夜遅くに公園でうさぎを探し回ることはできないので、

ティッピー捜索は明日にしよう。

ラビットハウスに帰り着くと、お店はもうバータイムの営業が始まっていた。

「ココアちゃんお帰りなさい、今日は遅かったのね」

「うん、物理の先生とちょっと話し込んじゃってて」

「えらい！　そういえばココアちゃん、中学校では理科が得意だったってお母さんから聞いてるわ。物理が好き？」

「好きです！」

「私は生物が好きだったわ。物理はなかなかわからないところが多くて」

「物理のポイントはいくつかあるから、そこをうまく押さえると大丈夫です！今度教えます！」

「楽しみね♪　ココア先生、よろしくお願いします」
「先生だなんてそんな」
「その割にはココアちゃん、顔がにやけてるわ」
先生と呼ばれるとなんだか照れちゃう。中学校時代はお友達に理科を少し教えたりもしていたよ。
お店がだいぶ混んできたので、私は早めにおうちの方に引っ込んだ。まだバータイムの時には働けない。高校からの指示で、お酒が出る時間帯のお店では働いてはいけないことになっていた。いつかバータイムの時に、私とチノちゃんとリゼちゃんと、スタイリッシュな制服を着て働くのが夢。そのためにも、みんなを取り戻す必要がある。でも、先生の話だと、物理学的には取り戻せそうにない。となると、ココアお姉さん（仮）が少し話していた「まじゅつ」を使うことになるんだろうか。

先のことをくよくよ考えるより、まずはティッピー探しに全力を注ぐことにしよう。二百羽の中からただ一羽を見つけ出さなければ。

翌火曜日の放課後、私は公園まで走って来た。今から日暮れまでにティッピーを見つけ出したい。でもこの広い公園に散らばったもこもこのアンゴラウサギの中から、どうやって見つけ出したらいいんだろう。いきなり途方に暮れてベンチに座り込んだ。

「あら、ココアさんこんにちは～」

「青山さん！」

青山さんが笑顔で手を振っていた。そうだ、青山さんならティッピーを探す手がかりを知っているかもしれない。

「青山さん、聞きたいことがあるの」

「なんでしょう」
「この公園で、アンゴラウサギがどこにいるかわかる？」
「もこもこしたうさぎさんですね。この公園ですと、だいたい五か所に分かれて固まっている感じです。一つの群れ、といった感じのものが、あまり固まっていはいないのですが、だいたい四十羽から五十羽くらいですね」
　青山さんの情報は、ココアお姉さん（仮）が教えてくれたものとだいたい合っていた。群れが五つで、多くても五十羽程度であるなら、今日一日だけでなんとか探し出せるかもしれない。
「ちなみに、どこにいるかわかったりは……？」
「群れは時々動くのですが、だいたいの場所はですね……」
　青山さんがバッグから原稿用紙を一枚取り出し、さらさらと公園の見取り図を描いた。結構上手い。その図の中に五つの丸が書き込まれた。

「こんな感じです。ではまずここに向かってみましょう〜」
今いる場所から一番近い丸を指さし、青山さんは歩き始めた。
「あの、手伝ってくれるの？」
「大事なお友達を探す手がかりになるのでしょう？」
すべてを見通しているかのような言葉だった。青山さんと一緒なのは心強かった。

えーっと……、この中にいるのかな……？　一つ目の群れの所にたどり着いた私たちは、一面を覆いつくすようにうろちょろしているうさぎたちの群れを前に呆然としていた。どういうわけか、アンゴラウサギの群れとほかのうさぎさんたちの群れが一緒になってしまっていた。アンゴラウサギそのものはもこもこした感じなのを探せばいいと思うんだけど、そのもこもこがあっちに行っ

たりこっちに行ったりしていた。
「ちなみに、探しているうさぎさんの見た目はどんな感じになりますか？」
「こう、究極のもこもこというか、本当に丸っこい毛玉みたいなうさぎなんだけど」
「うーん、それっぽいうさぎさんは何羽かいるみたいですね」
ココアお姉さん（仮）は、私にならティッピーを見つけられると言っていた。でも見ただけじゃわからない。こういう時は一羽ずつ抱き上げてみるしかないか。一番近くにいたアンゴラウサギのもとに近づき、すっと抱き上げた。毛並みが気持ちいい～もふもふ～もふもふ～……
「ってもふもふしてる場合じゃなかった！」
果たしてこの毛玉がティッピーなのか。まるでピンと来なかった。
「どうでしょう、お探しのうさぎさんでしょうか？」

「わからない……」

その時、携帯のメールが届く音がした。もしかして。

『ココアお姉さんだぞ！　真のティッピーを抱き上げると、私と通信がつながるようにできたから、頑張って探してね♡　ちょっと技術的な問題で、ティッピーがどこにいるかまではこちらではわからないんだ。ごめんね！』

「……」

アンゴラウサギを一羽ずつ全部調べなければならないようだった。ひとまず、今抱き上げているこのうさぎさんは違うらしい。そっと地面に戻し、次なるうさぎにターゲットを定めて一歩踏み出した瞬間。

「わっ」「きゃあっ」

うさぎたちが一斉に散り散りになって逃げだしてしまった。あとには一羽も残らず、ただの芝生だけが広がっていた。

「……逃げちゃいましたね」
「うん……逃げちゃった」
その後、残る四つの丸のところに行ってみたけど、アンゴラウサギは影も形もなかった。今日は運がなかったと思って諦めるしかないのかな。すでに日が傾いていて、これ以上捜索を続行するのは難しかった。もし今日探しきれなかったら、次は金曜日にしかここに来ることはできない。
「どうします、ココアさん？」
「金曜日に、また探しに来ます……」
撤退宣言をするよりほかになかった。
水曜日と木曜日は完全に上の空・パートIIだった。学校で勉強したことも、ラビットハウスでお仕事したこともほとんど覚えていない。授業ノートはきちんと取られていたし、コーヒーカップを割ったりすることはなかったけど、木

曜日は途中でドクターストップならぬサキさんストップがかかり、とても心配されちゃった。

そして金曜日。公園でのティッピー捜索二日目。今日こそ見つけるんだ。青山さんの言ったとおりに群れが戻っていれば、アンゴラウサギの群れは五つに分かれているはずだった。前回は群れを散り散りにしてしまった。今日はぽかぽかあったかい陽だまり力（ぢから）を全力で出していこう。ひだまりぢからのチャージよし。

群れのひとつめにたどり着いた。もふもふが二十匹。ひだまり力オーラを出しながら近づくと、前回逃げだしたうさぎさんが逆に近寄ってきた。まず一匹目を抱き上げてもふもふ。気持ちいい～、でもなんかしっくりこないし、ココアお姉さん（仮）との通信がつながった様子もなかった。このうさぎさんは

ティッピーじゃない。次は……やっぱりなんか違う。

結局、ひとつめの群れにはティッピーはいなかった。ふたつめ、みっつめ、よっつめ、それぞれアンゴラウサギを抱き上げてもふもふして満足……こほん、捜索を続けていたけど、見つからなかった。

最後、五つ目の群れを探しに行こうとしたとき、木の陰に群れから離れたアンゴラウサギがいたのを見つけた。見た目が記憶にあるティッピーに一番近かった。これはもしかして。そっと近づいて抱き上げた。このもふもふ感、なんだか懐かしい。そしてココアお姉さん（仮）の言う通り、念じる。聞こえますか、αの私。

『見ぃつけた♪』

「わっ！」

『はいはい、αのお姉ちゃんだぞ？　ふーっ、やっと安定した回線を構築でき

たね』

ココアお姉さん（仮）の声がティッピーから聞こえてきた。ひょっとして、みっしょんこんぷりーと？

『そう、みっしょんこんぷりーと。これで第一段階突破だよ』

ついに、また一歩前進できた。みんなを取り戻すところに近づくことができた。

「ところで、なんでティッピーを探す必要があったの？」

『今までは限られた時間しかそっちと連絡が取れなかったけど、これで常時連絡ができるようになったね。私の科学力と、ティッピーの力、そしてあなたにあった魔力』

「魔力？」

『おっと口が滑っちゃった。その話はおいおいするね』

「魔力ってマジカルなあれ？　私魔法使いなの？　まさかー」
『さすが科学少女だね。まあ、理論を話せば論文ができあがるけど、今はふわっと魔法ってことにしといてね』
さすがに本当の魔法ではないだろうけど、説明が難しそうなのでとりあえず受け入れることにした。青山さんに聞くと何かわかるかもしれない。

ココアお姉さん（仮）の話によると、この私には、この世界ではまだできないはずの、並行世界とやり取りをする力、並行世界へ行き来するための力を持っているらしかった。本来ならその力は、このような事態が起こらなければ使われるはずがなく、持っていることすら気づくきっかけがないはずのものだった。ココアお姉さん（仮）は、並行世界を探索しているなかで私の存在を発見し、おしゃべりでもしようと準備していた矢先に、みんなが散り散りに

なってしまう事件が発生したという。そこで急いで連絡できるようにしたと。

『私の探索によると、どの世界線の私も、この力を持っているみたい。ただ、使えるようになっていたのはあなただけで、この私も使えない』

「そうなんだ」

なんだか、こうなったときのために用意されていた力みたい。そんな気がした。持っている力がみんなを助けるために使えるなら、なんでも使ってみんなを助けたい。

『どうやって力を使えるかはまだわからないけど、やっぱり杖がいるのかなー……』

「ますます本物の魔法使いみたいだね」

大きな杖を持って、魔導書（まどうしょ）を片手に魔法の呪文を唱える私の姿を想像して、思わず笑った。あるいは大きな杖でなくて、小さなステッキかもしれない。チ

ノちゃんやみんなにマジックを披露したときに使った大切なもの。この世界のラビットハウスにあるのかな。あのステッキには苦い思い出があるけど。私のみぞおちをフルパワーで一突きしてきたことは忘れられないよ。あの時は乙女らしからぬひどい声を出しちゃった。

『とりあえず、並行世界へ移動したり、並行世界をつないだり、アクセスするための魔法の使い方を調べて、準備を整えよう』

「うん！」

『それで、ティッピーをラビットハウスに連れて帰ってもらえるといいんだけど』

ティッピーとともにラビットハウスに帰り、サキさんとタカヒロさんに相談してみた。

「サキさん、お願いがあるんですけど……」
「なあに？　ココアちゃんの頼みなら何でも聞いちゃう♡」
「その、この子を飼いたいの」
「あら、モフモフしてるうさぎさんね。この感じはアンゴラウサギね」
「ダメ、ですか……？」
「いいわ♪」
「ほんと!?」
「その、タカヒロさんは……」
「サキがいいというなら、私は歓迎するよ」
「『ありがとうございます！』」
「あら、うさぎさんから、大人のココアちゃんみたいな声が聞こえてきたわね……」

「ふ、腹話術です！」

『ラビットハウスはとてもいいところですね♪』

「あら嬉しい♡」

こうして、ティッピーと一緒に暮らせるようになりました！

自分の部屋までティッピーを連れていき、部屋に鎮座していたティッピーぬいぐるみを横に並べてみた。

「わあー……もふもふが二倍だあ……」

ティッピーの上にぬいぐるみを載せ、ティッピー・オン・ティッピーをしてみようとしたけど、そちらは載せて三秒で振り落とされてしまった。

倉庫から持ち出してきたケージ、その他もろもろの資材でティッピーハウスを整えて、ティッピーにはそこで過ごしてもらうことにした。ぎゅーって抱きしめて眠りたいのはやまやまなんだけど、うっかり押しつぶしちゃったらかわ

いそうだし。

ティッピーにお休みを言い、私はティッピーぬいぐるみを抱いて眠りに落ちた。

土曜日。今日は朝から夕方までラビットハウスでご奉仕する日だった。ティッピーを見つけ出すことができたので体が軽い気がする。開店早々常連さんが来たので元気いっぱいで迎えるよ！

「いらっしゃいませ！」

「あらココアちゃん、元気になったのね」

「やっぱり、元気がないように見えました？」

「そうねえ、ココアちゃんは太陽だけど、ここ最近は今にも雨が降りそうな感じだったねえ」

「ご心配おかけしました。これからはいつものココアに戻ります！」
「元気なのが一番だよ。カフェラテをお願い」
「かしこまりました！」
今日はいつも以上に忙しくて、お昼頃に交代で一時間休憩したとき以外は、ずっとホールでくるくるしていたよ。商売繁盛はいいことだ。でもこれだけ多いとやっぱりチノちゃんやリゼちゃんがいないと回らないなあ……
夕方四時、喫茶店としてのラビットハウスは営業終了。このあと六時からはバータイムになる。バックヤードに戻って制服から私服に着替えて、自分の部屋へ。
『こんばんは木組みの私！　今日は一日仕事だったかな？』
「お客さんがいつも以上に多くてもうへとへとだよお～」
『そうね、そちらの世界線だとお昼もお客さんがいっぱいなんだね』

「そうじゃないセカイもあるの？」

『常連さんが何人かだけの隠れ家的採算度外視ラビットハウスがあったり、バータイム専門に移行したラビットハウスもあったなあ。まあ、いろいろ』

「はぐらかされた気がする」

『まあ、それはさておき。お話しよ？』

それから、本題が何かわからないままココアお姉さん（仮）による一方的な話が始まった。弁護士として仕事を一件やりとげたこと、お酒一口で酔っ払ってダウンして、α世界のチノちゃんに介抱されたこと、パン作りの腕を鈍らせないために週末はひたすら小麦粉をこねていること、千夜ちゃんとシャロちゃんが同棲していること、ココアお姉さん（仮）とチノちゃんもルームシェアしていることなどなど。

『そうそう、こっちのチノちゃんからメッセージを預かっているよ』

「なになに!?」
『はじめましてココアさん。きっとそちらの私はココアさんのことを待っています。多分泣いています。見つけてあげてください。だって』
「なんだろう、そっちのチノちゃんだいぶくだけている気がするんだけど」
『きっと仲良く暮らしている成果だよアイタっ』
「……チノちゃんに叩かれた？」
『叩かれた……ぐすん』
「いいな……私もチノちゃんに会いたい」
『大丈夫。あなたの力をもってすれば必ず見つけられるから』
「うん」
チノちゃんと私はどこでも仲良し、一心同体といってもいい姉妹だから。だから、必ず私の手で見つけ出す。

『それで本題、リゼちゃんのいる世界とあなたの世界を接続できそうという観測結果が出たよ』
「ほんと？」
『ほんと。明日の夜、街を見渡せる高いところに行って。なにか魔法の杖みたいなものを持って』
「マジックセットのステッキでもいい？」
『いいと思う。……マジックはしなくていいけど、うっかり集中が途切れるようなことが起きないようにしてね』
「集中が途切れる？」
『うん、たとえばステッキが暴発してみぞおちに一発食らったり』
「うっ」

『……ステッキが暴発しないようにテープ巻いていった方がいいと思う』

「わかった」

それから明日すべきことをいろいろと話して、通信を終えた。

次の日。いよいよ夜を迎えた。今日ははやる気持ちを抑えて授業に集中していた。学校が終わるやいなや、みんなへのあいさつもそこそこにラビットハウスに取って返し、必要なものの準備をした。マジックセットのステッキを取り出し、危うくみぞおちを突かれそうになったのを回避してテープでぐるぐる巻きにして紙袋に入れた。そしてリゼちゃんとのつながりを生み出すかもしれないアイテムをひとつ。最後にティッピーを頭に載せて……のせ、のせ……あれ、載らないなー。チノちゃんってとてもバランス感覚が良かったんだね。仕方ないので勝手についてきてもらうことにした。ついてきてくれるといい

けど。ティッピーを介してココアお姉さん（仮）に連絡を取ろうとしたけど、

「ごめん、今日は残業で遅れそうなの！　頑張って！」って言われた。

「サキさん、ちょっと出かけてきます」

「あら、ティッピーちゃんのお散歩？　気を付けてね」

夜の街、もう五月ともなると暖かくなってきていた。私の心はそれ以上に熱く、ドキドキしていた。いよいよみんなを見つけ出すための第一歩を踏み出せる。ティッピーははぐれることなく私についてきてくれた。坂を上って高台にたどり着いた。

「わあー……」

光のじゅうたんが敷き詰められたような光景が広がっていた。私は自分の体感での一年前、この街に来たばかりの頃のことを思い出した。みんなと一緒に温水プールに行ったとき、きれいな夜景を見ながらコーヒー牛乳をぐいっと飲

み干したことを覚えている。あのときみたいに、街はきらきらと輝いていた。

「さて、と」

ココアお姉さん（仮）から教わった通り、街の光を目に焼き付けるように見た後、目を閉じ、ステッキを捧げるように持った。そして念じる。

（リゼちゃん、どこにいますか？　リゼちゃん……）

ふと、風が変わった。自分の中から何かがあふれだすような感じがする。全身に力がみなぎったような感じがした時、目を開いてステッキを構え、大声で宣言しながら彼方を差した。

「サイエンティフィックマジカルフュージョン！　世界の扉よ、開け――！」

ステッキの先から光のようなものがはじけた気がした。みなぎった力がすべ

てステッキに吸い取られ、思わず意識を手放しそうになる。その後を追うように強い波のような感覚におそわれた。そして、

鈴の音のような澄んだ音が聞こえ、あたりは静寂（せいじゃく）に包まれた。

「終わっ……た……？」

『おめでとう。世界の接続に成功したよ』

ティッピーからココアお姉さん（仮）の声が聞こえてきた。

「ほんと？」

『うん、この世界はリゼちゃんがいる世界線とつながった。天々座家のお屋敷にリゼちゃんがいるようになった』

今すぐにでもリゼちゃんのもとに行きたい気持ちでいっぱいだったけど、もう夜だし、行くのは明日にした方がいいかもしれない。

『とりあえず、ラビットハウスに戻ろっか』

ココアお姉さん（仮）に勧められ、ティッピーとともに家路（いえじ）についた。帰り道でまた頭にティッピーを載せようとした。一瞬だけうまくいったような気がしたけど、すぐに滑り落ちてしまった。

明日は月曜日。学校のあとにリゼちゃんのもとに行って、……行って、どう話したらいいんだろう。リゼちゃんは元の世界のことを覚えているのかな？

『うーん、実はそこまではまだつかめていないんだよね』

「全く知らないこともあるってこと？」

『ありえるかも』

「どうしたらいいのかな」

『やはり正攻法、ラビットハウスに誘ってみるのはどう？　出会いはラビットハウスだったし』

「よし、ラビットハウスに誘おう」

『銃を突き付けられないようにねー』

いざ出陣！　目指すはリゼちゃんを取り戻すこと！

（「セカイにひとり」中巻へ続く）

# 第二部　月はまた満ちる

# 月はまた満ちる

「チノちゃんおやすみー」
「おやすみなさい、ココアさん」
金曜日の夜、ちょっとだけ夜ふかしして、私の部屋でココアさんとおしゃべりしていました。わくわくする週末の始まりです。ココアさんもスキップするように部屋から出ていき、ドアを勢いよく開け……
ゴン、と何かにぶつかる音がしました。それも二回。

「「いたたたた……」」
二人の声が聞こえました。一人はココアさんで、もう一人？
「あれっシャロちゃん？　どうしたのこんな夜遅くに？」
シャロさん、ですか？
「……ごめんなさい、一晩だけでいいからここで寝させてくれないかしら……廊下でも倉庫でも、軒先でもいいから……」
涙を浮かべたシャロさんがいました。

「シャロさん、ココアでも飲んで落ち着いてください」
ひとまず私はキッチンでホットココアを三人分作って持ってきました。シャロさんは重い雰囲気を漂わせていますし、ココアさんも珍しく神妙な顔をしています。

「整理すると、千夜ちゃんとケンカしたんだね？」
ココアさんの問いに、シャロさんが弱くうなずきます。
「ケンカっていうか、……やっぱりケンカね。きっかけはささいなことだったのよ……」
シャロさんがぽつりぽつりと話し始めました。
「フルールでのお仕事を終えて帰ってきたところだったの、甘兎の植え込みに水をまいてた千夜が何かにつまづいたみたいで、桶と柄杓がこっちに飛んできたのよ……」
中身の水もろとも頭からかぶってしまって、全身濡れ鼠状態になってしまったそうです。千夜さんは天然なところがありますから、躓きついでに持っていたものを飛ばしてしまうことも十分ありえます……ちょっと失礼なことを考えてしまいました。

「教科書とノートが濡れちゃったのはいいとして……あんまりよくないけど、携帯電話が運悪く水をまともにかぶってしまって、動かなくなっちゃって」

しおしおとしていたシャロさんが、不意に顔を険しくしました。

「……あの和菓子馬鹿、何したと思う？　糸電話をこっちに差し出してきたのよ！」

糸電話……千夜さん流のボケでしょうか……

「そっからケンカになったの」

『なんで糸電話なんか持ってくるのよ！』

『うちとシャロちゃんちの間の連絡に必要かと思って』

『こんな時にボケてんじゃないわよ、どうしてくれるの！　携帯壊れちゃったじゃない！』

『……ごめんなさい。代わりは責任を持って手配するわ』
『もうあんたなんかに頼らない！』
『え、でも』
『絶交よ、この和菓子馬鹿！』
『……シャロちゃん、その言い方は無いわ』

「そこからは売り言葉に買い言葉で、うちの前で大ゲンカになったの。千夜のおばあちゃんが不在で、止めてくれる人もいなかったし……」
「シャロちゃん……」
「……それで、勢いで携帯電話投げつけちゃって……ケガ、させちゃったあ……」
シャロさんはポロポロと涙をこぼし始めました。ココアさんが慌てて抱きし

めます。

「……それで、何もかも投げ捨てて逃げてきちゃったの。ずっと公園にいたんだけど……家にも帰れなくて、公園で夜を明かすのも怖くて、……ごめんなさい。やっぱり家に帰らなきゃ。千夜に謝らなきゃ」

よろよろと立ち上がって帰ろうとしたシャロさんが、不意にくしゃみをしました。

「シャロちゃん、せめてお風呂に入ってって！　風邪引いちゃうよ！」

ココアさんが無理やりお風呂の方に押していきました。

……ココアさんがなかなか帰ってきません。たぶん一緒に二回目のお風呂に入っているんでしょう。それがいいと思います。その間にちょっと考えてみます。

千夜さんとシャロさんは幼馴染で大の仲良しです。過去の話を聞く限りでは、結構ケンカもしてきているらしいです。ちょっとうらやましいと思ってしまいます。小学校の頃はほとんど友達がいませんでしたし、マヤさんとメグさんとお友達になったのは中学校で出会ってからでしたし。でも今回はいつものケンカとは様子が違ってそうです。

そうしていると、ココアさんとシャロさんが帰ってきました。シャロさんはココアさんのパジャマを着ています。

「ありがとうココア、じゃあ家に帰るわ……」

「ちょっと待ったシャロちゃん！　パジャマで外を出歩いちゃだめだよ！」

「カーディガンを貸してくれるかしら、夜だから誰も見てないし、帰れると思う……」

「だーめ！　今日はラビットハウスでお泊まりです！　これはお姉ちゃん命令

です！」
「いつココアが私の姉になったのよ……」
思いつめた表情のシャロさんが少し笑ってくれました。
チノちゃんも一緒に寝よー！　ココアさんの鶴の一声で、私もココアさんの部屋で並んで寝ることになりました。断る理由はありませんので。
「とりあえず作戦会議は明日にしよう！　今日はおやすみ！」
そういうなり、ココアさんはあっという間に寝てしまいました。あとに残された私とシャロさんは顔を見合わせて、お互いふふっと笑いました。
「ごめんなさいチノちゃん、私のわがままに付き合わせちゃって」
「いいえ……その、意外でした。千夜さんとシャロさんのように仲良しでも、ケンカになっちゃうことってあるんですね」
「そうね……こんなにひどいことしちゃったのは初めてだけど……」

「そうですか……」
「ところで、チノちゃんはマメちゃんたちとケンカしたことはある？」
「ちょっと言い争いになることはありますけど、でもケンカしたことはありません。マヤさんもメグさんも優しいですし」
「それは良かったわ。もしケンカになったとしても、絶対に私みたいに友達を傷つけちゃダメよ」
「はい……」
おやすみなさい、お互いに挨拶を交わしてお布団に入りました。

『チノもメグもだいっきらい！　チマメ隊解散！』
『それはこっちのセリフだよマヤちゃん！　チノちゃんも！』
『もうマヤさんもメグさんも知りません！　解散です！』

勢いで目が覚めました。外が明るくなっています。なんか嫌な夢を見てしまった気がしますが、あっという間に記憶がおぼろげになっていきます。嫌な夢は忘れてしまうのがいいです。

ところで、いつもはねぼすけなココアさんがいません。シャロさんも。階下に降りていくと、お二人がキッチンで朝食を作っていました。

「おはよう、チノちゃん」

「おそようだぞ！　今日はお姉ちゃんの勝ち！」

「なんの勝負ですか……」

テーブルについて、三人で朝ごはんを食べます。今日はシャロさんに配慮して、心が落ち着くハーブティーを出しました。カフェインでテンションがハイになってしまっては、謝るどころではなくなりそうですし。

ご飯を食べ終わって身支度をすると、作戦会議が開かれました。
「作戦、千夜ちゃんちに一直線に突撃！　以上！」
「ココアさん本当に考えたんですか？」
何も考えてなさそうなココアさんの宣言に突っ込むと、意外にもシャロさんがそれに賛同しました。
「ええ、覚悟を決めるべきね。下手な策なんていらない、一直線に行きましょ」
「それでこそシャロちゃんだよ！　じゃあ早速行こう！」

甘兎庵に行くと、千夜さんのおばあさまが出迎えてくれました。
「昨日はうちの千夜が迷惑かけたね。申し訳ない」
「いえ、元はと言えば私が悪いんです……」

かばんや携帯電話は回収しておいたよ、そう言っておばあさまはシャロさんに荷物一式を渡しました。
「ところで、千夜に会えますか……？」
「部屋にいると思うけどね、これ千夜、千夜！」
そう言って奥に千夜さんを呼びに行ったおばあさまが、ほどなくして首をかしげて帰ってきました。
「どこか出かけたみたいだったよ。『ちょっと出てきます』って書き置きがあった」
「そうですか……ありがとうございます」
千夜が戻ってきたらすぐ知らせるよ、おばあさまのその言葉に感謝しつつ、私達はお店の外に出ました。
「ふたりともありがとう。千夜が戻ってきたらすぐ行けるように、私は自分の

家にいるわ」

シャロさんとはここで別れました。ココアさんと一緒にラビットハウスに戻ると、リゼさんがアルバイトに来ていました。

「お前たち遅いぞ、どこ行ってたんだ」

「野暮用ってやつだよ！　矢と棒と用でやぼよう！」

「……ココア、天然でボケてるのか本当に知らないのかわからないがどっちだ」

「ココアさんのことですから、本当に知らないんだと思いますよ」

「えへへ」

「ココアは国語を復習しろよな」

さて、お仕事です。着替えに行こうと更衣室に行ったら、ドアの前に長い髪のおばけがいました。

「……ココアちゃん、チノちゃん……」
「千夜ちゃん！？」
泣き腫らした顔の千夜さんでした。

とりあえず、表に案内すると、リゼさんも驚いていました。
「千夜、いつの間に来てたんだ？　てかひどい顔になってるぞ、何があった？」
「……ううん、なんでもないの。お仕事の邪魔しちゃいけないし、帰るわ……」
「だめだよ千夜ちゃん！　どうせお客さんいなくて暇だし、今から話聞くよ！」
「ココアさん……悲しいことを大きな声で言わないでください……」
はい、ラビットハウスは今日も開店休業です。夜のバータイムはとても賑わうんですが……。お客さんがゼロなのに店員がアルバイト含め三人もいるっ

て、どうなんでしょう。

みんなでテーブル席に集まって、千夜さんを囲む会の始まりです。とりあえず、シャロさんから話を聞いたことは伏せておくことにします。

「みんな私が悪いの……」

千夜さんがぽつりぽつりと話し始めました。

「昨日の夕方ね、甘兎の前でシャロちゃんに会ったの。お店の前のお花に水をあげてて、新作の和菓子に付ける名前を思いついたから、嬉しくてシャロちゃんに飛びつこうとして……バカね私……お水が入ったままの桶を持ってたのに」

「水でもかけてしまったのか？」

「ええ、バシャーッって……それからタオルを持ってきて、それで、シャロ

ちゃんの携帯電話が壊れちゃったらしくて、この週末に一緒に買いに行くことにして、でもシャロちゃんちとうちの間に連絡手段があったほうがいいかなって……その……糸電話を……」

「糸電話あっ!?」

リゼさんが驚きのあまり立ち上がってテーブルに手を付きました。

「おままごとじゃあるまいし……」

「それでどうなっちゃったの？　ケンカになっちゃった？」

ココアさんの質問に、千夜さんは力なくうなずきました。

「シャロちゃんがとても怒っちゃって、私も何したらいいかわからなくなっちゃって、気がついたらシャロちゃんに言い返しちゃって……ひどいこといっぱい言ってしまったわ……」

「うーん……」

「それでシャロちゃんが携帯電話を投げてきて、そのまま家に帰らずにどこか行っちゃったの。学校のかばんも置き去りにしたまま」

シャロさんの話と符合しますね。ところでシャロさんは、千夜さんにケガをさせてしまったと言っていましたが。

「千夜ちゃん左腕どうしたの？」

ココアさんの指摘でそちらを見ると、腕が包帯でぐるぐる巻きになっていました。

「……これは、なんでもないわ。ちょっとひねったのと、後はかすり傷だから」

「ちょっと見せてくれ」

リゼさんが慎重に千夜さんの腕を取って観察し始めました。やはりＣＱＣの達人として気になるのでしょうか。

「腕が折れたり、ひびが入ったりしているわけではなさそうだな。でもかすり傷じゃないだろ」
「いいえ。シャロちゃんに言ったひどいことに比べればこんなの……ッ！」
「無理しないでください」
「そうだよ！　ケガがひどくなっちゃう」
「ごめんなさい……」
そういうなり千夜さんは立ち上がり、よろよろとお店を出ていこうとしたので、三人がかりでまた席に押し込みました。こんな状態ではシャロさんに会う前に事故に遭いかねません。コーヒーを飲んでもらいましょう。千夜さんの好きなものはどれでしたっけ。
「どうぞ。オリジナルブレンドです」
「ありがとうチノちゃん、いただくわ」

千夜さんは少し落ち着いたみたいでした。
「シャロちゃんにすぐ謝ろうと思って、おうちの前で真夜中まで待ってたけど帰ってこなくて……ひょっとしてラビットハウスかなとも思ったんだけど、夜中で確かめに行けなくて、それで今朝になって来てみたらいなかった……」
どこに行っちゃったのかしら、そうつぶやいた千夜さんの目からぽろぽろと涙がこぼれてきたので、リゼさんがハンカチを貸しました。
「あのね千夜ちゃん、実は昨日の夜、シャロちゃんを泊めたんだ」
「そう……それなら良かったわ……一晩どこか知らない、危ない場所にいたわけじゃなかったのね……」
「シャロちゃんもね、千夜ちゃんにひどいこと言って、ケガさせちゃったって泣いてた」
「そんな……！　悪いのは全部私……！」

「うん、これなら仲直りできそうかな……なあシャロ」
「ぴっ！　リゼ先輩、いつから気づいてたんですか!?」
その声にお店の入口の方を見ると、シャロさんが来ていました。
「私がちょっとした扉のきしみに気づかないとでも思ったのか？」
最初からだよ、とリゼさんが笑って言いました。
聞いてみたところ、一旦は家で待とうと思ったものの、たぶんラビットハウスに来るだろうと思って、また戻ってきたら千夜さんの姿を店内に見つけたそうです。それでお店にこっそり入ったものの、出ていくタイミングを失って隠れていたと。
「すごいね！　やっぱり千夜ちゃんとシャロちゃんは運命共同体だよ！」
ココアさんが今にも踊りだしそうな感じで私を振り回し始めました。なんで私を揺さぶるんですか。

ささ、後は若いお二人で……とココアさんが変なことを言いつつシャロさんと千夜さんを一緒のテーブルに座らせ、我々は近くのテーブルに移りました。客席に堂々と座ってお客さんの話を聞く店員三人組って、なんなんでしょうか。

「ねえ……って左腕ひどいことになってるじゃない！　こんなことしてる場合じゃないわ、すぐに病院行かなきゃ！」

「大丈夫よ、もう手当てしてもらって、傷薬を何日か塗れば大丈夫だってお医者様が言ってたから」

「そう……」

それからしばしの沈黙。千夜さんから再び話し始めました。

「……携帯電話壊しちゃってごめんなさい」

「携帯電話はいいわ、買い直せばいいだけだし、それよりそのケガと……ひど

いこと言っちゃってごめんなさい」
「そんな……！　私の方こそ、ひどいこと言ってしまったわ……」
再びの沈黙。でも少し暖かくなってきている感じがしました。
「ねえ、このあと携帯電話の買い替えに付き合ってくれない？　何がいいのかよくわからなくて」
「ええ、一緒に行きましょう」
「それから……」
シャロさんはおもむろに千夜さんの右手を両手で包むように握りました。
「左手が使えないのは大変でしょう？　何でもサポートするわ」
なんでしょう、この光景はまるで……
「王子様とお姫様みたいだね、チノちゃん」
ココアさんがそうささやきかけてきました。

また元通り、笑顔で話をする千夜さんとシャロさんの姿がそこにありました。

（「月はまた満ちる」了）

# あとがき

はじめまして。麦と申します。インターネット上ではより詳しく識別するために「麦（穀物P）」と名乗ったりしています。

本作品を書こうと思ったきっかけは、岸雨三月さんのごちうさ二次創作小説「現実と並行セカイの境目ですか？」に出会ったことでした。私は二〇一四年のアニメ第一期放送でごちうさを知り、以来ずっと原作とアニメの両方を追い続けています。しかし、二次創作界のごちうさ分野には足を踏み入れておら

ず、作品に触れることもありませんでした。たまたま出会ったこの小説に私は引き込まれ、ごちうさのまだ見ぬ世界を想像してみたくなりました。元来タイムトラベルや並行世界ものが好きだったこともあり、似たようなテーマとはなりますが、並行世界ものとしてひとつ作品を作ってみようと思った次第です。「セカイにひとり」は、上中下巻の三巻構成となります。ココアさんがみんなと再び出会い、元のセカイを取り戻すときまで、今しばしお付き合いください。

本巻では、後半に千夜・シャロを主人公に据えた短編「月はまた満ちる」を収録しました。千夜とシャロの幼馴染的関係は私の構想するごちうさの人物カップリングの原点です。「月はまた満ちる」は自分の作品の中でもお気に入りのひとつで、また最も大きい反響をいただいており、大変うれしく思ってい

ます。こちらもお楽しみいただければ幸いです。

麦（穀物P）

セカイにひとり　―遠く散ったみんなを探して―　上

著　者：麦（穀物P）
発行元：麦之穂
サイト：https://muginoho.ehoh.net/
連絡先：mugi_grainp@protonmail.com
発行日：二〇二一年（令和三年）一月十七日
印刷所：ちょ古っ都製本工房（https://www.chokotto.jp/）

「……お前は
**誰**だ？」

「**誰だか知らない**けど、ちょっと付き合って頂戴」

「**知らない人**にはついていっちゃダメだって、お母さんに言われているの」

**みんな思い出して、**
**一緒にいたセカイのことを……**

「うれしい、私、**初対面の**可愛い女の子に口説かれちゃった♡」

「あはは、**はじめまして**のお姉さん、変わってるね♪」

# セカイにひとり　中

2021年（令和3年）夏　刊行予定

……がんばります